
怨恨の崇拜者

中野南北

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

怨恨の崇拜者

【Nコード】

N2160W

【作者名】

中野南北

【あらすじ】

人に捨てられた少女は、鬼に拾われた……。
決して親しまない二つの種族は何百年もの間、対抗姿勢を崩さなかった。その深く大きな亀裂に、鬼に育てられた一人の人間が立ち向かう。

1 鬼の住む島

背の高い樹木が立ち並び、湿った地面を覆う落葉が草花を育てる。涼しく爽やかな森の空気が、島全体に独特な木の香を漂わせていた。

人間の文明を感じさせない孤独な緑の島に、少女は一人、仰向けに倒れていた。身に纏った赤い上等な衣や、黒くて光沢のある髪が土で汚れる事も気にせず、微かな呼吸で胸を上下させ、広い島の森の中でも、一際大きな巨樹を虚ろな瞳で見上げている。

歳が十にも満たぬ彼女は、非常に衰弱していた。

三日前。先日から降り続けている豪雨と激しい強風が吹き付ける中、海は大きな波を幾つも生み出し、狂った怪物のように暴れ続けた。

そんな嵐の中を、金や銀の装飾が幾重にも施された豪華で巨大な船が、遠く離れた島国から、この緑の島へと四日掛けて遣って来た。

船は波のうねりでひどく揺れながら島の海岸沿いに止まり、錨も下ろさずに、幼い少女を一人岸边に下ろすと、さっさと針路を転回させ、逃げるように荒れる海へと帰って行った。

一人で孤独に残された少女は強風に煽られ、冷たい雨と波飛沫を全身に浴びながら、自分を置いて波に揺られて去る大きな船を、その姿が彼方に消えるまで寂しげな瞳で眺めていた。

船の姿が見えなくなると少女は膝から崩れ、濡れた髪や衣を風になびかせながら、その場で声を出して泣き始めた。強く吹く風も冷たい雨も気にする余裕が無いようだ。

少女は長い間うずくまって、涙を流し続けた。

嵐が去ったのはその日の昼頃だった。強く吹き付けていた風や激しく降っていた雨は嘘のように静まり、温かな太陽が空に現われている。しかし、島を取り囲む海だけは未だに荒れ狂い、幾つもの波が激しくうねっていた。

少女は髪から滴る水滴を袖で拭いながら、濡れた衣を不快に思いつつ、涙が枯れ果てた瞳で、様々な形をした雲が静かに泳ぐ青い空を見上げていた。

そしてゆっくりと立ち上がると、海岸からこの島の大部分を占める広い森へと足を進めた。何か食べられる物を探そうと考えたのである。

この島の森は、眼を見開くほどに美しかった。

力強く立派に聳え立つ何本もの大木。それらが枝に付ける青々とした葉には、先程の雨の水滴が太陽の光を反射させ、きらびやかに輝いている。

独特な木の香りが森中に漂う。湿った地面や落ち葉、折れた枝の上を歩く感触。

名前も分からない花々や動物達、虫はあまり好きではないが、少女はそれ等全てを好奇心旺盛に、楽しそうな表情で体験し、眺めた。

しかし、心に残る大きな不安と悲しみを、誤魔化しきる事は出来なかった。

夕暮れ時、少女はようやく、食べる事が出来そうな植物の実を見付けた。森の中でも特に大きな巨樹の周りに咲いている植物で、桜桃のような赤い実だ。

少女は実を一つ植物からもぎ取ると、少しだけ前歯でかじってみた。途端に、ひどい苦みと舌が痺れるような渋みが口の中に広がり、少女は慌てて吐き出した。

それから、数分もしない後である。少女が口の中に残る渋みを不快に感じて困っていると、突然、体が重くなる感覚に陥り、立っていられなくなった。ひどい吐き気と、燃えるような頭の痛みが少女を襲い、遂にはその場で倒れてしまった。

少女が赤い実には毒があるのだと了解した頃には、最早指一本動かすことも出来なくなっていた。

以来この三日間、少女は動く事が出来ず、巨樹と赤い実を付けた植物の側ですっと横たわっている。その間に、随分と衰弱してしまっ

ひどい苦しみの中で、少女は走馬灯のように自分の人生を振り返りながら、静かに意識を失った。

ふと気が付くと、少女は誰かに呼び掛けられていた。深い闇の中から、落葉や湿った地面の上に横たわっている感触が戻ってきたので、ゆっくりと瞼を開けた。

そこには背の異様に高い、頭に二本の角を生やした、青い目の男が立っていた。男の鼻と耳はやけに尖っており、口に生える歯や手足の爪は凶器のように鋭い。

彼は酷くしわ枯れた声で『気が付いたか？』と、横たわる娘を見下ろしながら尋ねた。

途端に、少女は自分の体がとても楽になっている事に気が付いた。疲労感は未だに強く残っているが、赤い実が与えた影響であろう、頭の痛みや吐き気などは嘘のように治まっている。

『人間がここにいる理由を、是非とも聞いてみたいものだ』

男は猜疑心を含んだ声音で、低く言った。

少女はその時、たくさんの疑問が心の中に浮かぶのを自分で感じた。

船を下ろされた時、この島には誰もいないと聞かされていたのに、何故人がいるのだろうか。

それに、男の姿は普通の人間とはとても思えない。角は生えてい
るし、爪や歯は鋭く瞳は青い。顔には古傷が幾つもあり、身に纏う
衣も見たことの無い生地で作られている。その上、声は聞き取りずら
い程に低くしわ枯れていた。

そして一番の大きな疑問点は、あれだけ苦しかったのに、何故自
分の体がこれほど楽になっているのかである。もう、自分は助から
ないと思っていたのに……。

少女は黙って横になったまま、困惑した表情で男を見付めている
と、彼は体を屈め、そこに生えている赤い実を一つ採った。

少女はその実を恐れて体を起こし、フラフラしながら後退った。

『鬼狂いの実だ。我々鬼ですら、これを少量食うだけで死ぬ。お前
は運が良い。私が丁度、解毒薬を持っていた』

男は空の薬瓶を少女に振って見せながら、幼子に諭す様なゆつく
りとした口調で言った。

少女は目の前で薬瓶を振って見せている異様な男が、自分を助け
てくれた恩人であるという事と、彼が鬼であるという事を、素早く
理解して簡単に受け入れた。物を疑う事を、少女は知らなかったの
である。

少女は覚束ない足取りで姿勢を正すと、鬼に向かって御辞儀をし
ながら礼を言った。

「た……助けて下さって、有り難うございました」

鬼は体を屈めたまま、衝撃を受けた様な顔をした。その表情に、少女は自分が何か悪い事をしたのだらうかと不安になった。

『お前、私の言葉が分かるのか？』

鬼は表情を固めたまま言った。どうやら鬼は、理由は分からないが、少女には自分の話す言葉が分からないだらうと思っただらう。

確かに聞き取り辛い声ではあるが、意味ははっきりと伝わる。少女は少し訝しく思いながら、こくりと頷いた。

『そうか』

鬼はそう言うと、静かに立ち上がった。やはり背は相当に高く、少女の三倍はあるだらう。

『人間を恨むか？ 人間よ』

鬼は少女に向き合っていると、表情を崩さず、唐突に低い声で尋ねた。

少女は質問の意図が分からず、黙って、鬼の恐ろしい顔を見上げていた。すると、もう一度鬼は同じ言葉を繰り返した。少女は一考した後に、はっきりと言った。

「恨みません」

すると、鬼は間髪入れずに少女を怒鳴った。鬼気迫る表情である。

『何故恨まぬ。お前は、人間の生け贄であろう？ お前は奴等に希望を与えたのに、奴等はお前から全てを奪ったのだぞ！』

牙を向けて言う鬼に、少女は激しく怯えながら、くらくらする頭を抑えて呟いた。

「み……皆……泣いてたから……」

鬼はまた、更に衝撃を受けたように、古傷だらけの顔を一層歪めさせた。彼の心の中でおきている葛藤を少女は知らず、鬼の表情の変化を不思議そうに見上げている。

強い風が吹いた。大木の枝に付いた青い葉や地面に落ちた枯れ葉達が宙に舞う。冷たい風が、少女と鬼に強く吹き付けた。

1 鬼の住む島（後書き）

始めまして、南北です。

読んで頂いた方は分かると思いますが……かなり拙い文章＋分かり
難い表現。

すみません、素人です。書きなれてない様子がひしひしと伝わりま
すな。

何にせよ、読んでくれたアナタ、感謝です。

2 人間の娘

広大な森林に囲まれた里がある。家や湯屋、学び舎などの建物が建てられ、田園や牧場などが幾つも設備された、広い広い里がある。その風景は何も妙なところなど無い、人が住むには当たり前前の光景が広がっている。

しかし、その里に住む人々には皆、頭から角が生えている。加えて男も女も異様に背が高く、それに合わせて建物の入り口から小部屋まで、全てが天井高く造られていた。彼等が話す言葉も、人間の世界では話される事の無い珍しい言語だ。

そう、ここは鬼人の島。高い知能と強い力を持ち、自然を愛する種族の島。

学び舎の卒業を一ヶ月後に控えた二月の初め。里を囲む森も、天井の高い建物も、硬い土の地面も全てが雪によって白く染められ、辺りに色を残す事を強く拒んでいた。

そんな白一色の世界に、鈴音という名の少女が、これ又白い衣を着て雪が振り積もる笠を被り、新雪が堆積する地面に足跡を付けながら歩いて行く。

彼女はこの里に住む大半の鬼人よりも背が遥かに低く、笠の下には角も生えていない。鋭い牙も無く、赤鬼か青鬼かをその色で見極める瞳の色も黒だった。

鈴音は、人間なのである。この島に住む唯一の人間だ。

十年前、鈴音はこの島の森で死にかけているところを、青鬼のレインという薬調合師に救われたのだ。行く宛の無い幼い少女を、レインは放って置く事が出来なかった。種族の間に争いがあるにも関わらず、里の長老である青鬼の爺に許しを貰い、自分の息子・リアンと、人間の捨て子・鈴音を男手一つで育ててきたのである。

鈴音とリアンは、先月十六歳になった。来月には十年通い続けた学び舎を卒業し、二人共成人となった後は薬調合師になるつもりだ。

しかし、鈴音はある重大で大切な夢を抱いている。誰にも話した事は無いが、自分にとっては何よりも優先したい大切な夢だ。

雪が止み、鈴音は立ち止まって頭から笠を取った。笠の上に降り積もった雪が、小さな音を発して真っ白な雪の地面に落ちる。

『困ったな……』

鈴音は小さな声で、鬼の言葉を使って独り言を呟いた。

『何が困ったんだ？』

唐突に、誰かが言った。鈴音はビクツとして急いで辺りを見渡す。声の主は鬼犬であった。真っ白な毛で、雪に同化するように鈴音の数歩左に座っていた。

『ビックリしたあ……君は……アンおばさんの家の子だね。ええっ

と、名前は……』

『アードだよ。それで、何が困ったんだ？ 人間』

アードと名乗った鬼犬は、ピンと立てた耳の横にある角を誇らしげに立てて、気取るような調子で言った。

『鈴音って呼んでよ。何に困ってるかは、君に教えたら広まりそうだし……言わない』

悪戯っぽく笑いながら、鈴音は話した。アードは鈴音の腰程まである立派な体軀をブルブルとさせて、自分に積もった雪を払ってから、少し怒った口調で言った。

『忘れたか？ 我等の言葉は鬼人には通じん。何故お前に通じるのか知らんが、オレが鬼人に話したところで、吠えてるだけだと思われて意味は通じんだらう』

鈴音はその言葉でハツとした。そうだった。人と犬が話せないのと同様に、鬼人と鬼犬が話せないのは当たり前だ。鈴音には、変わった才能があり、相手が鬼の種族ならどんな言語でも、意味を持って伝わるのだ。当たり前でない事を、当たり前前の事だと思ってしまう。

『ごめんね……そうだった』

アードは、苛々している様子を隠そうともせず、唸るように言った。

『あゝあ、だ・か・ら、何が困ったんだ？』

大きな鬼犬に唸られて少し怖がりながら、鈴音はようやく話を話し始めた。

『わたし、もう直ぐ学び舎を卒業するんだけど、薬調合師以外にね、やりたい事があるの。あ、薬調合師には、レイン叔父さんから知識は受け継いだし、昔からなりたい職業ではあるんだけど……』

アードは黙って聞いている。

『でもわたしには、どうしてもやりたい事があってね。それが……そう……鬼人にとっては、許されない事だと思うの……だから、誰にも言い出せなくて……』

鈴音はそこで黙り込んでしまった。また雪が降り出したというのに笠を被ろうともせず、俯いたまま動かないで突っ立っている。

『鬼人の事情か。それで、その夢ってのは何だ？』

アードが興味有り気に尋ねると、鈴音は困ったように笑って、小さな声で呟いた。

『人の世界に行く事』

立派な体躯の鬼犬は、驚いて口を開けた間抜けな表情をして、焦った様に意を伝えた。

『そ……それは不味いだろう、人間……』

鬼人と人間が友好的な関係を築いたとされるのは、信頼できる資料で二百年程前の事である。

では、それから二つの種族はどうなったのか？ 答えは、大きな戦乱がつい三十年程前まで行われていた事を考えれば分かる。鬼人と人間の関係は、最悪であった。

百年以上続いた争いは、両者に大変な数の犠牲者を出した。怨みは強まり、感情の限界を幾つも突き破りながら、修復不可能な程に互いが互いを憎み合った。

戦乱に終止符を討ったのは、遂に戦いの限界を迎えた鬼人達の逃亡によるものだった。鬼の種族全体は、鬼人を中心に故郷の巨大な大陸を捨ててバラバラになりながら、各々小さな島に、人間から見つからないようひっそりと暮らす事に決めた。この緑の島も、その中の一つである。

『そんな歴史があるのは、温室育ちの鬼犬であるオレでも知っている。鬼人は皆、例外なく人を恨んでいるぞ。お前もよく知っている筈だ、人間』

アードは『人間』を特に強調して、重々しく言い放った。鈴音はその言葉に頷いて、顔を僅かにまた俯かせる。雪が黒い髪や細い肩に積もってしまっている。

『何故、行ってみたいと思う？ やはりここは、お前にとっては孤独か？』

『うづん……。違つよ。わたしは……』

言い掛けた所で、『アードちゃん！』と呼ぶ甲高い声が聞こえた。アードは『主人だ！ やべえ！』と言って、凄い速さで走って消えた。体毛が白い為、その姿は直ぐに見えなくなってしまう。

『あら！ 鈴ちゃん！？ 雪に埋もれちゃうわよ！』

近所に住むアードの飼い主、アンおばさんが甲高い声で言った。アンおばさんは頭に角が二本生えていて、瞳が青い青鬼である。普段から寒がりで、鬼山羊から取れる柔らかかな毛で繕われた、ふわふわの上着を何時も羽織っている。やはり背は高く、鈴音の全長はアンおばさんの胸の辺りまでしかない。

アンおばさんは、鈴音に積もった雪を分厚いその手で乱雑に払った。そして、鈴音が手に持っている笠を引つたくと、無理矢理それを鈴音の頭に被せた。

『美人さんが風邪でも引いたら大変よ。来月は卒業の式があるのだし、大事な時期でしょう』

このお節介さが、アンおばさんの良いところだ。レインおじさんの妻は早くに亡くなっているので、鈴音は彼女を母親のように慕い、育ってきた。

『そつだ、鈴ちゃんは卒業した後どうするの？ 鈴ちゃんは賢いからねえ。ウチの子見てご覧、あれや、駄目だよ。リアン君も良い男になったし、レインさんは子育てが上手いねえ』

『いえ……そんな……』

鈴音が謙遜しかけた所で、『見付けてみる!』という挑発の音が聞こえた。多分、アードがおばさんに向かって吠えたのだろう。アーンおばさんにはただ鬼犬が吠えた声が聞こえただけで、自分の飼った鬼犬が自分を挑発しているなんて夢にも思っていない筈だ。

アーンおばさんは当初の予定を思い出して、叫ぶように大きな声で言った。

『アードちゃん! 何処にいるの!? 鈴ちゃん、またいつかね!』

鈴音は、アード並みの素早さで視界から消えたおばさんに向かって、『さよなら!』と挨拶を返し、まだどこか温かみのある笠を被り直した。

人間を恨んでいるはずの鬼人でも、わたしと親しくなれる……

なら、いつまでも続く、この二つの種族間での亀裂だって、埋め直す事が出来るんじゃないだろうか……

わたしが人の世界に行けば、鬼人も人間も、互いに誤解する事なく、仲良く過ごして行けるように、変えられるのではないだろうか

……

これが、鬼に育てられた人間である、鈴音の大切な夢であった。

2 人間の娘（後書き）

漸く一歩、話が進んだ感じでした。

小説書くのは思いの他疲れますね……。

読んで下さったアナタ、感謝です。

3 赤鬼の悪意

鬼人は身体形質の特徴によって、二つの種類に分類する事が出来る。

一つは青鬼。瞳の色が青く頭に二本の角がある。もう一方は赤鬼。瞳は赤く頭には一本の角があり、青鬼に比べて、牙や爪が鋭い。その上、身体能力がとても高く性格も凶暴で暴力的だ。

二種類の鬼人達は、基本的には互いを尊重し合い、争う事もなく平和に過ごしている……が、種族間での問題事が全く起こらないという訳では無い。それがどんな事かと言うと、人間の事である。

赤鬼は人間を皆、滅ぼすべきだと考えている。これは、赤鬼が元来好戦的な性格である事と、戦争の最前線で戦っていた為、人間との戦いを目の前で見てきた結果、生まれた考え方だと思われる。一部では人間との戦乱を再び望む者までいるらしい。一方、青鬼は人間と関わる事それ自体を止めようと考えている。

この意見の違いが僅かながらにも、二種類の鬼人達に亀裂を生んでいるのであった。

鈴音は、アンおばさんに別れを告げた後も雪の中を歩き続けていた。土の上に新しく降り積もった白い新雪は柔らかく、一歩進む毎に足が膝まで沈み込む。とても歩き辛い道で、鈴音は体力を激しく消耗させて、呼吸を荒くしていた。

暫くそうして歩き続けていると、里を取り囲んでいる広大な森へと繋がる道に辿り着いた。重たそうな雪を乗せた、背の高い樹木が何本も立ち並んでいる。森の中にまでは入れないが、この道には薬の材料となる植物がたくさん生えているのだ。今、その植物達は厚い雪に埋もれていて採る事は出来ないが、背の高い樹木から雪と共に落ちた実は、冷たい雪の上に、無造作に転がっている。鈴音はそれ等の木の実を採りに来たのである。

雪が吹き荒ぶ中、鈴音は木の実が疎らに落ちている樹木の下まで歩き、そこに屈み込むと、積もった柔らかな雪を素手で掻き出した。それ程深く掘らなくとも、直ぐにたくさん木の实が出てくる。黄色い小さな硬い実で、烏眼の実という胃腸薬の材料になる実だ。

鈴音は烏眼の実を、事前に持ってきた青い布の袋に入るだけ入れた。その後、しっかり袋の口を紐で締めて、自分の懐に仕舞った。

用事を済ませた鈴音は、元来た道を帰ろうと立ち上がった。すると、突然に大きな笑い声が聞こえてきたので、鈴音は何事かと驚き、辺りを見渡した。自分の十歩程前方に、瞳が赤く、頭に角が一本生えている三人の男の赤鬼が、笠も被らずに横に並んで立っていた。鈴音の同級生で唯一の赤鬼達であり、学び舎でも嫌われている連中である。

『やあ、人間。僕等の縄張りで何をしているのかな？』

真ん中に立つ、一番背の低い赤鬼が気取った調子で言った。

『縄張りって……ロラン、いつから森に繋がる道があなた達の物になったの？』

鈴音が怒った口調で不快気に言い捨てると、向かって右側に立つ、酷く太った角の短い赤鬼が、どもりながら声を荒げて言い放った。

『ロ……ロダン様にえ……偉そうな……ロき……聞くな！』

鈴音は相手のどもった声を何とか聞き取り、『はあ』と溜め息を漏らしてから、呆れたように言った。

『分かったわ、ドリー。いつから、森に繋がる道は、貴方様方の物になったのですか？』

ドリーと呼ばれた赤鬼はそれを聞いて、満足した様にフンと鼻で笑った。ロダンという小さな赤鬼も、偉そうに腕を胸の前に組んで笑んでいる。ただ、向かって左側にいる、随分と細く背の高い赤鬼は、ずっと顔を顰めていた。

『いつからここが僕達の縄張りになったか……言っただけでやれレイピア』

ロダンがニヤニヤしながら威張り口調で言うと、レイピアと呼ばれた背の高い痩せた赤鬼が、急に驚く程大きな声で吠えるように叫んだ。

『いつからだ！？　ここは鬼人の島だ！　お前は人間だろうが！　最初からこの島は俺達の物だ！』

鈴音はあまりにも大きなその声に、耳を塞いで迷惑そうな表情をした。赤鬼に何を言われても大抵の事なら気にしないが、レイピアのその言葉は鋭い刃のように彼女の心を貫いた。人間と鬼人との間にある深い亀裂は、永劫消え去る事が無いのだと、目の前で告げられた気分になったのだ。

『長には……許して貰ったもの……』

鈴音は心の傷を三人の赤鬼に悟られぬ様に、強い口調で言ったつもりだった。しかし三人は鋭く、鈴音の動揺に気が付いている。ロダンが不快にヘラヘラ笑って言い募った。

『人間は敵だよ。僕達の故郷を奪って、偉そうに生きている。これ以上何を奪う気だい？ 人間！』

鈴音は益々傷付いて、肩を窄めた。自分が罵倒される事より、永遠に修復出来そうにない種族の間柄をはっきり示される事の方が辛かった。

『それにー』

『女子相手に三人がかり！ 笑止千万！』

ロダンが罵倒を続けようとした瞬間、それを遮って、鈴音にとっては聞き覚えのある声が唐突に響いた。その声は、鈴音にしか聞き取れない鬼動物の言語だった。

『お……鬼猪だ！』

ドリーが鈴音の後ろをずんぐりとした指で差しながら酷く恐れた調子で言うと、鈴音の背後から、雪の上をノシノシとゆっくり歩く、巨大な鬼猪が現れた。鬼猪は、鬼人の誰よりも大きい、ピンと立った耳の両横にある角がたくましげな、誇り高く気高い種族である。

『お久し振りです、鈴音さん。凄い雪ですね』

鬼猪は巨大な牙を揺らしながら、鈴音の身を庇うように半歩前に出て丁寧と言った。鈴音が「うん……久し振り」と返事をするや否やに、レイピアがまた大きな声で叫んだ。鈴音はとっさに耳を塞いで、口をつぐんだ。

『汚らわしい獣が！ さっさと森に帰れ！』

ロダンもドリーもそれに勇気付けられたのか、若干の躊躇いを見せながらも鬼猪を罵倒し始めた。

『黙らっしやいー！』

鬼猪の一声で、三人の罵倒は掻き消された。鈴音以外には、鬼猪の言葉は巨大な獣が激しく鳴いているように聞こえる。相当に恐ろしいものだったのだろう。三人の赤鬼は顔色を蒼白にして、「ヒィ」と情けない声を出すと、一斉に逃げ出した。

『馬鹿な子供達だ』

鬼猪が溜め息混じりに呟く。鈴音は雪が積もった笠を頭から取り、頭を下げた礼をした。

『有難う、カイナ。暫く会わない間に大きくなったね』

鈴音のその言葉を聞いて、カイナという名の鬼猪は慌てて言葉を返した。

『頭など下げないで下さい。あの時私の命を救って下さった恩。悪ガキ共を懲らしめたくらい、何という事もございませぬ』

あの時というのは、五年前の事である。鈴音が森の中で薬草を探している、森の中腹で、強い毒に当たったらしい鬼猪が倒れ、苦しんでいた。鈴音は既に大抵の解毒薬を作る技術を持っていたので、鬼猪の命を即席で作った薬で救ったのである。その鬼猪がカイナであり、それから、恩を大切にしている鬼猪達種族は、鈴音を良く慕っているのだ。

『ううん、でもお礼は言わせてね』

まだ、赤鬼三人組に言われた事を気にしつつも、鈴音は無理矢理に作った笑顔で丁寧に言った。

『恩人には、悲しい思いをしてほしくないのです。あの者共に何を言われたのか存じませぬが、気にしないで下され』

『恩人には、悲しい思いをしてほしくない……』

鈴音はカイナの言葉を繰り返した。不意に、頭には自分の夢をレインおじさんに告げた時の、おじさんの失望が想像された。

『どうか、なさいましたか……？』

カイナが大きな顔を鈴音に向けながら不安気に尋ねた。鈴音はハツとして、顔に微笑を作って答えた。

『大丈夫、わたし帰るね。有難う、また会おうね』

枝に積もった大きな雪の塊が、音を立てて地面に落ちる。鈴音は、カイナの疑念を含んだ視線を背中に感じながら、笠を被り直して雪

が舞つ中を再び歩きだした。

3 赤鬼の悪意（後書き）

週一は中々難しい……。ミスが多々あると思います。指摘して頂ければ幸いなのですが、取り敢えず内容が分かる程度にはしたつもりです。

読んで下さったアナタ、感謝です。

4 未来への葛藤

「……わたしは、これからどうやって生きていけばいいのでしょうか……？」

幼い少女が、森に舞い落ちた青い葉や細い木の枝の上を歩きながら弱音を吐いた。辺りは既に薄暗くなり、一緒に並んで歩いている背の高い鬼が、少女を一瞥もせず、ただ前を真っ直ぐに見詰めて低い声で答える。

「人間としてのお前は死んだ。今からお前は、鬼人として生きるのだ」

森を抜けて、広い里が見えた。樹木のない景色を、少女は久し振りに眺めた。

木造の建築物が立ち並ぶ島の集落に、二百人程の鬼人達が暮らしている。皆それぞれの職に見合った生活をしていて、裕福とは言えないまでも、それなりに安定した生活をしていた。建てられた鬼人の家々はどれも天井が高く造られていて、一軒一軒が非常に大きい。全ての家が三十年程の建築なのだが、それよりも遙か昔から、そこに在り続けていたかのような趣きを出している。自然と共に生きる鬼人達は、自分達の家の庭に多様な植物を育てる事も忘れない。

鈴音は漸く自分の住む里に着き、叔父さんとリアンと共に、三人で暮らしている我が家へと帰ってきた。家は二階建てで、部屋は全てを合わせると十もある、鬼人にしては大変に広い家屋だ。

鈴音は鬼人の為に造られた、人間にしてみると大き過ぎる玄関の戸を開けて言った。

『ただいま!』

すると、いつも通りの気だるそうな低い声で、居間の方から返事が返ってくる。

『お帰り〜』

あの声はリアンのものだ。昼寝でもしていたらしく、声はつきりとしていない。鈴音は笠と長靴を脱いで、雪に濡れた髪と衣を布で拭きながら、声のした居間へと向かった。

『リアン、おじさんは何処にいるの?』

鈴音は、居間で寝っ転がって読書をしているリアンに向かって尋ねた。リアンは、おじさんにそっくりな顔を鈴音に向けて、眠たそうな青い目を手で擦りながら答えた。

『薬草をアンおばさんに届けに行った。おばさん、犬を追っかけて転んだらしいぜ』

リアンは言いながら笑っている。

『笑っちゃ駄目でしょう……』

『親父に何か用でもあんのか?』

リアンがゴロゴロと寝返りを打ちながら、別段興味も無さそうに尋ねる。

『鳥眼の実を採ってきたのと……後……』

鈴音は言いながら口籠もった。すると、リアンは鋭く瞳を光らせ、突然厳しい声で言い放った。

『ロダンに何かされたか』

リアンは勘が鋭く、嘘が通用しない。鈴音は焦り、慌てて言葉を返した。

『別に、大した事はされてないよ。それに、おじさんと話したい事は、もっと重要な話……』

『やっぱり、何かされたんだな？ あいつ……今度会ったら……』

『争わないでね、リアン。わたし達、もう直ぐ大人になるんだから……』

学校を卒業したら、成人になる。成人の鬼人が守る法には、争いを起こした者を厳しく罰するように定められているのだ。あの三人のせいでリアンが傷付く必要はない。

『わたしは全然大丈夫。お昼ご飯作ってあげるね。何がいい？』

鈴音はパツと笑顔になって明るく言った。その言葉に、リアンは渋々といった様子で返事をして、それ以上赤鬼達については追及しなかった。

『ねえ、リアン。もし……もしもだよ。薬調合師以外になりたい夢があつて、それがとても難しい事だったら、どうする？』

鈴音が唐突に、リアンに頼まれて作った鬼魚の照り焼きと米を二人で食べながら尋ねた。リアンは腹が減っているらしく（大方朝食でも抜いたのだろう）、凄い勢いで昼食を食べながら尋ね返した。

『どうするって？』

『叔父さんに言うか……諦めるか……』

リアンは食べるのを止めて暫く真剣に考えた。それから少し時間を置いて、彼にしては珍しく真面目な声の調子で言った。

『そうだな……俺はそんな事考えた事もないが、よっぽどそれが大切な夢なら、親父に言うだろうな。今直ぐにでも……』

鈴音は俯き、『今直ぐにでも……』とリアンの言葉を繰り返した。

『鈴音、お前がどんな事を考えているのかは知らねえ。だがな、お前が何かに悩んでいるのは、俺も親父も知っている』

その言葉に鈴音は驚いて、リアンの顔を真っ直ぐに見た。リアンは微笑んでいる。

『悩み事ってのは、俺はてっきり赤鬼絡みだと思ってたんだが、成る程な、職の事で悩んでたのか』

鈴音はその言葉に、『例え話だつてば……』と小さな声で呟いたが、リアンはそれを無視して続けた。

『親父は別に薬調合師になれって命令した訳じゃないだろ？ 他に考えがあるなら、遠慮無く言ってみたらどうだ？』

鈴音は僅かに首を縦に振った。しかし、リアンは知らない。鈴音の夢が、鬼人と人間との関係を深める事だという事を……。その為には、この鬼人の島を出て、人間の土地に行く必要があるという事も……。言おうとしたが、躊躇してしまい、機会を逃して結局話せなかった。

その日の夜。おじさんはアンおばさんから貰ってきた大量の果物を鈴音に渡して、低いしわ枯れた声で

『リアンにも分けてやれ』と言うと、さっさと薬草調合部屋へ行つてしまった。鈴音は自分の夢を言い出すどころか、烏眼の実を渡す暇さえ無かった。

(このまま言い出す事も出来ずに、夢を忘れて年老いていくのだからか……)

鈴音は晩ご飯の時も、隣に座るおじさんに話しを切り出す事もせず、暗い気持ちのまま、自分の意気地のなさと心の弱さにひたすら嫌悪感を抱いた。

鈴音は眠る直前、自分に与えられた十畳程の部屋で布団に包ま
て、叔父さんと出会った日の事を思い出していた。深緑の森の中、
叔父さんは今も変わらない古傷だらけの顔で、鈴音に何度も繰り返
して言っていた。

『人間の事は忘れるのだ』

叔父さんは幼い頃に人間の手によって、自分の住んでいた村を破
壊された。その時、家族も友達も皆殺されたらしい。常人以上に、
人間を恨んでいるはずだ。だと言うのに、人間である鈴音の命を助
けた理由は、誰も知らない。勿論そんな事を本人に聞けるはずもな
いので、鈴音は心の中で時々疑問に思う事しか出来なかった。

『おじさんは人を嫌ってる……』

鈴音は布団の中で、小さな声で呟いた。人の世界に行きたいなど
と言ったら、絶縁されるかもしれない。しよせんお前は人間だった
のか……と暗い声で言うおじさんを想像した。頭の中から、黒い空
想が止めることも出来ずに湧いてくる。

『どつしよつ……』

卒業まで後一ヶ月。時間は止まる事無く、流れるように進んで行
く。

鬼人と人間が仲良く過ごせる未来を、思い続けて何年経つだろう。
歴史を学べば学ぶ程、叶わぬ願いだと感じてきた。それでもこの夢
は消える事無く、心の中に有り続ける。

その日に鈴音が見た夢は、不思議なものだった。とうに忘れ去っ

た筈の、家族の夢だったのだ。豪華な船に乗せられる直前、見たこともないような上等な衣を、母が着させてくれている。

「あなたは、これから天国に行くのよ……」

母は泣きながら、鈴音の着物を帯で結んだ。鈴音は涙で濡れる母の顔を、寂しそうな眼で見詰めている。隣には、厳格そうな顔をした父がいた。悔しそうな表情をした四つ年上の兄もいる。たとえ夢であろうと、人を見たのは……家族を見たのは久しぶりだった。

鈴音は夢の中で家族の顔を見渡して、考え直した。

（わたしは、何と言われても人間なんだ……。鬼人に育てられた、人間だ。決して鬼人になりきる事も、人を忘れ去る事も出来ないんだ。でも、だからこそ、出来ることがある筈だ……）

次の日の朝、鈴音は寝巻きのまま自分の部屋を出ると、叔父さんの部屋に小走りで行った。戸を二度叩くと『いいぞ』という低いしわがれた声が返ってきた。鈴音は戸を急いで開けて、部屋の片付けをしているおじさんの後ろ姿を見つめて言った。

『全部、お話します』

たったこれだけの言葉に、叔父さんは片付けをしていた手を止め、鈴音のほうを見て滅多に見せない笑顔を作った。

『待っていたぞ。さあ、話せ』

二人は向かい合って座り、話し始めた。

4 未来への葛藤（後書き）

展開が唐突なんですよね……。修行（書く量）が足りなくて、どの程度詳しく書けばいいのか未だに分からない……。読んで下さっている方、有難うございます。

5 宝の言葉

冬の早朝。暖炉に火をつけて間もないレインおじさんの部屋は、とても寒かった。吐く息は白くなり、薬草の独特な香りが漂う部屋の中を、鈴音は寝巻きのままで、おじさんと向かい合って話しを始めた。

『わたしに悩み事があるのは、既にご存知なのでしょう？』

鈴音は一言一言重々しく、ゆっくりと切り出した。おじさんは目を瞑って腕を胸の前に組み、胡坐を掻いた体勢で鈴音の言葉に頷く。

『わたしが悩んでいる事は、卒業した後についてです。このまま何事もなければ、わたしは薬剤師になって、一生この島で働いて、老いていく事になるでしょう』

おじさんは黙って微動だにせず、話しを聞いている。

『でも、わ……わたしには、薬剤師になる以外の夢が……あるので』

鈴音はそこで、俯いて黙り込んでしまった。ああ……なんて自分は意気地がないんだろう……。

おじさんは片目を空けて、鈴音の様子をチラッと確認すると『続ける……』と静かな声で促した。

鈴音はおじさんの声を聞いて、不思議に勇気が湧いてきた。勇気付けられた鈴音は『はい』と返事をして、真っ直ぐにおじさんの顔

を見詰め直した。

『夢と言うのは、わたしが幼い頃から度々思い描いていた、一種の希望と可能性です。わたしの特別な生い立ちを利用する事が出来るのではないかと、考えています』

鈴音は一拍おき、思い切って言った。

『人間と鬼人の関係を最良のものに、したいのです』

おじさんは両目を開いて、しかし黙ったまま、何を思っているのか、鈴音の顔をジッと見詰めている。

『長い歴史の中で、二つの種族の関係が悪くなってしまうている事は、学び舎で習いました。偶に、人間であるわたしを見る眼が冷たい鬼人もいます。鬼人の皆が人間をどれ程恨んでいるのか、よく分かっているつもりです』

鈴音はおじさんの様子を気にしつつも続ける。

『それでも、恨みあう関係が続くのは、もう終わりにして欲しいのです。わたしは自分が鬼人のつもりで、今まで生きてきました。これからもそうです。でも、人間である事実を変える事は出来ないんです。どれほど強く望んでも、それは変えられません』

『だから、お互いが恨み合う姿を見ているのは、とてもつらいんです。鬼人の皆は……全員とは言えませんが、わたしを受け入れて下さいました。でも、そんな優しい皆を、わたしと同じ人間は恨んでいるのです。皆も人間を恨んでいる……この何時までも続く連鎖を、もう終わりにさせたいのです』

鈴音は最後、涙声になって言っていた。しかし、おじさんは表情を変えずに、相変わらず冷静に低い声で尋ねる。

『百年以上掛けて作られた連鎖を、どうやって終わらすつもりだ？』

鈴音は何時の間にか涙を流し、深呼吸してから申し訳なさそうに言った。

『人について……分からない事が多過ぎるんです。まず、人について学んでから、行動しようと思っています』

『つまり、無計画か……』

おじさんは何故か、笑みを浮かべて言った。怒られると思っていた鈴音は、不思議に思って困惑した表情になった。

『無謀だが……面白い。お前を止める気はない。私に言えるのは、無事に帰って来いという言葉だけだ』

鈴音はおじさんの言う事が理解できずに、惚けた表情をしている。おじさんは続けた。

『この島から外に出るには、長の許可が必要だ。人間の島に行く為の足もいるだろう。これから一ヶ月間は大変だぞ？』

鈴音はおじさんの言葉を最後まで聞いて、やっと全てを理解し、涙を目に溜めながらパツと笑顔になった。

『どうやって行くんだ？』

リアンが調査室で薬を煎しながら尋ねた。鈴音は烏眼の実を鉢で潰して汁を取る作業をしながら、笑顔で答える。

『鬼イルカの皆に船を引つ張ってもらうの。彼等ならよく人の島に行くし、力もあるから安心でしょ？』

『ああ。それにしても、よく親父は許可したな。人間の所に、何時帰って来れるかも分からねえし……人間だし……』

リアンは聞き取れない程の小さな声で、最後の言葉を付け加えた。鈴音はニツと笑って元気に言ってみせる。

『大丈夫、変えてみせるよ』

『そっぴや、人間の着物を持っているのか？ あいつらの妙に固い衣』

リアンは鈴音のことを相当心配しているのか、母親のように色々なことを尋ねてくる。鈴音は苦笑いをして残念そうに話した。

『うーんとね、持ってないの。だから、鬼蚕の糸で作った出来るだけ人間の衣に似せた着物を着ていく』

リアンはまた別の事を尋ねようとしているらしく、ずっと唸って言い淀みながら、遂に決心して真剣な表情で尋ねた。

『いいか？ 嫌なら答えるなよ。家族に、やっぱり会いたいか？』

鈴音は一瞬呆けた表情をして、次に困ったように笑いなら、声の調子をわざと明るくして、何故か人間の言葉で答えた。

「捧げられた命と見返りに、最高の栄誉を与えよう」

リアンが作業を止めて不思議そうな表情で鈴音を見ると、鈴音は相変わらず困ったような笑顔を浮かべて、続けた。

『生け贄を捧げた身内にはね、どんな身分でも凄い地位が与えられるの。多分、わたしの家族は、今では上流階級の地域に住んでいるから、旅人として国に入るわたしとは会えないよ』

鈴音のあっさりした口調に、リアンは言葉を返さなかった。

『長が許可を下さった』

卒業式を前日に迎えた冬の終わりの日。鈴音はおじさんの部屋に呼び出されて告げられた。

『人間の世界に行くにあたり、長に挨拶に行かねばならぬ。卒業式が終わり次第、一人で長の家に行くのだ。どんな話をするのか私も知らぬ』

おじさんは続けて、一気に話した。その表情は何処か寂しげだった。

鈴音は薬草の匂いが漂う部屋の中、正座をして考えていた。そし

て、この一ヶ月間とても気になり続けていた事を尋ねた。

『おじさん……どうして、人の世界に行く事を、簡単に許して下さいたのですか？』

この質問をするのに、鈴音は大変な勇気が必要とした。許可を貰った時は嬉しくてただ喜んでいただけのだが、冷静に考えてみると、いくら何でも簡単過ぎると思ったのだ。人間を恨み尽くしているはずの鬼人達が、人間の土地に自分を送り込む事に、抵抗を全く感じていない様子は不思議だったし、自分勝手な考えではあるが、僅かに悲しかったのである。

おじさんはまた微笑んだ。この数日の間に、鈴音のおじさんに対する印象はすっかり変わってしまった。普段は滅多に笑わない人なのに、最近はよく笑うのだ。勿論その変化を、鈴音は喜ばしく思っていたのだが……。

『お前の未来を、私たちはずっと案じて来た。鬼人のこの島に、人間一人で生きていく事の辛さは、私達自身には想像できんものだったろう』

おじさんは自分の言葉に頷きながら言っている。鈴音は黙っておじさんの言葉を聞いていた。

『しかし、お前は負けずに生きてきた。お前は皆が受け入れてくれたと言っていたが、お前自身が皆の、人間に対する偏見を和らげ、お前自身が人間を皆に受け入れさせたのだ』

『それに、お前が真に幸せになるには、やはり、人間が必要だろう。娘の幸せを願うのに、我々の事情は持ち込まぬ事にしたのだ。考え

てみれば、当たり前的事だろうか?』

鈴音は心の奥底から、暖かい物が湧いてくるのを感じた。口をつぐんで涙でぼやける視界の中、震える手を必死に抑えながら、一言一言区切って言った。

『わ……わたしは、ここで、この島で過ごせて、おじさん達と暮らせて、幸せでした。必ず、帰って来ます。その時には、わたしを、迎えて下さいますか?』

叔父さんは鈴音の肩を優しく叩いて、しわ枯れた低い声で答えた。

『何時までも待っている。お前は、わたしの大切な娘なのだから』

鈴音はこの言葉を宝物として、未来永劫大切にしようと思った。

5 宝の言葉（後書き）

思っていたより長編になりそうです……。しかし、嫌なら見るな
とは言えない……。嫌でも見てくれ！
読んで下さった方、有難うございます。

6 旅立ちの日

雪がその姿を消した春の初め。鬼の島は元の緑豊かな景色を取り戻し、深緑の森や春の植物達が姿を現している。雲間から顔を出す暖かな太陽の日差しが、緑の島とそこで暮らす鬼人達の心を明るく照らしていた。

今日三月十日は鬼人学舎の卒業式である。暖かい風が春の甘い匂いを島全体に届け、自然までもが成人になった鬼人達を祝うように、穏やかな陽気だった。

卒業生七人は、涙を流す者もいれば、胸を張って校長の祝辞を聞く者もいる。しかし、そこにいるべき八人目の卒業生がその場にはいなかった。

卒業式が始まる直前の事である。村長が卒業生達の待機する学舎の教室に突然現れた。老齢の青鬼である村長は、威厳のある長い白髭を胸の辺りにまで伸ばし、顔に刻まれた深い皺を歪ませながら、ゆっくりと言った。

『すまぬが……鈴音、今すぐに、儂の家に来るのじゃ』

村長の言葉に逆らう事は許されない。正装をしたりアンや赤鬼三人組を含む同級生達は、何事かと皆不思議そうな表情をしている。鈴音は渋々同級生達に別れを告げて、村長の後を着いて歩いた。

村長の家は里一番に広く古い。とてつもなく大きな村長の家屋、

その一室で、鈴音は姿勢を正して村長と向かい合い、話しを始めた。

『どうか……なさったのですか？』

鈴音は厳しい顔をしている村長の顔を見て、緊張しながら言った。心臓の鼓動が高まる。

『茶も出さずにすまんの。お主が人間の土地へと渡る日を告げねばならん』

この島を離れる日。皆と別れる日を、鈴音は想像して悲しい気持ちになった。でも、これは自分で選んだ道だ。鈴音は真っ直ぐに村長を見て尋ねた。

『何時ですか？』

『今日じゃ』

村長の思わぬ返答に、鈴音は『え？』と聞き返した。すると、村長は申し訳なさそうに続けた。

『すまぬ……しかし、これは鈴音、お主の為を思つての事なのじゃ……』

鈴音はどこか遠くから村長の声が聞こえるように感じながらも、姿勢を崩さずに村長の話しを黙って聞き続けた。

『太陽国の人間の船が、島の周りをうろついておる。理由は知らんが、奴等は定期的に来ておるようじゃ。鬼イル力達は、相当に気分を害しておるじゃろう。鈴音、お主は早急に彼等との仕事を』

終わらせなくてはならん。鬼イル力達は、お前もよく知っている通り……気分屋じゃ」

『でも、今日じゃなくても……』

『交渉次第でイル力達は何とかなるやもしれん。しかし、島の周辺をうろつく人間に、農達鬼人がこの島に居ることを悟られてはならん……。そのためには、人間が姿を見せぬ今日が機会なのじゃ』

鈴音はそこで、はっとして声を上げた。

『三日前は……国王の誕生日……』

村長は頷いて答える。

『そうじゃ。奴等は、王の生まれた日に海に出る事はせん。太陽国からこの島まで四日。その間に、お主はこの島を離れるべきじゃ。すまぬ、もっと早くに告げるべきじゃった』

この三日の間に告げる事が出来なかったのは、言い出せなかったからである。卒業という祝い日に、皆と別れなければならぬなんて……。

それでも、鈴音はにっこりと笑うと、急いで立ち上がり、村長にお辞儀した。

『有り難うございます。準備して来ます』

村長は鈴音の態度が意外だったらしく、呆けている。鈴音は村長の広い家を出て、今日別れを告げる事となった、我が家へと急いで

向かった。

家に帰るとおじさんが驚いた様子で鈴音を出迎えた。

『どつしたんだ？』

鈴音は息を切らしながら、村長に告げられた事を説明した。おじさんはその間口を挟まずに、鈴音の話しを聞き続けた。

『そうか……そうか……。また、人間の都合か……』

『仕方ありません。それに、わたしはこれで良かったと思っています』

鈴音は一ヶ月前から準備していた荷物を整理して、鬼蚕の糸から作った衣のまま、袋に必要な物を入れつつ言った。

『何故だ……？』

おじさんは怪訝そうに眉を潜める。鈴音は今や、パンパンになった袋を持って立ち上がった。

『ひっそりといなくなった方が、皆に迷惑を掛けないで済むでしょう。おじさん、わたしが去っても、今日は誰にもこの事を告げないで下さい。せつかくの祝い日なんですから。わたし、鬼イルカのカイン達に事情を伝えて来ます。卒業式が終わるまでには、もう一度帰って来れると思います』

鈴音はそう言うのと、急いで海岸沿いに向かった。

その日の昼。鈴音はカイン達（鬼イルカ）に事情を告げ、急いで里に戻ってきた。しかし、不思議な事に、そこには誰もいない。おじさんもアンおばさんも、誰の人影もなかった。皆、卒業式を見に行ったのだろうか。最後に挨拶をしたかったのに……。

『よう、人間』

鈴音は声を掛けられて、後ろを振り返った。そこには、アンおばさんの白い飼い鬼犬、アードがいた。

『……結局、名前覚えてくれなかったね』

鈴音は、少し笑みを浮かべて、アードを愛しそうに見詰めながら言った。

『皆、何処にいったのかな……せめて、叔父さんとリアンには、挨拶したかったのになあ……』

空を見上げながら言う鈴音に、アードは、何が可笑しいのかクスクス笑っている。

鈴音が怪訝な顔を見ると、誤魔化すようにアードが言った。

『まあ、人間。鬼人にも事情があるのさ。さあ、この家にも、お別れを言いな』

『どうして、今日わたしが島を出ていく事……知ってるの？』

鈴音が首を傾げて言うと、アードは妙に焦って、何か思いついたように言った。

『鬼犬の聴力は凄いだよ』

鈴音は無理に納得して、『そう……』と微笑み、我が家に向かつて丁寧にお辞儀をした。十年間の思い出を、胸に秘めながら――。

鈴音は大きな広い森をアードと共に抜けた。途中、叔父さんと初めて出会った巨樹にも行き（後でこの巨樹は御神木だと知った）、赤い小さな猛毒の実を見て、懐かしそうに目を細めた。

海岸の小さな木製の船には既に荷物を置いてあり、遠くのほうでは鬼イルカ達が泳いでいる。取り敢えず、浅瀬を出て鬼イルカが泳げる場所まで、小船を漕いで行かなければならない。

鈴音は振り向き、砂浜に座っているアードを見た。

『お別れだね……』

鈴音は泣きそうになり、顔を俯けた。ここに来るのは、自分の運命を悲しんでいた、あの時以来だ。

鈴音は船に乗り込み、櫂を持った。

『人間。イルカ共のいる場所まで漕いたら、振り返ってこの島をもう一度見ろ』

アードが別れ際にそう言った。鈴音はその言葉に疑問を感じたが、ただ『うん』とだけ返した。言われなくても、最後に島の姿を見ようとは思っていたのだ。

『バイバイ。またね』

鈴音はそう言って、櫂で漕ぎだした。中々力のいる作業だったが、鬼イルカが泳げる場所まで、止まる事無く漕ぎ続けた。

『やあ、鈴音。さあ、俺とケインの角に縄をくくれ』

小舟よりも更に大きな体躯の、鬼イルカのカインが言った。隣にはカインの弟であるケインもいる。鈴音は言われた通り、頑丈そうな二匹の角に、小舟と繋がる太い縄をくくった。

『よろしくね。カイン、ケインさん』

カインは『ほいよ』と返事をし、ケインは無言で、頷くような仕草をした。ここから一番近い人間の島まで二日掛かる。目的地の太陽国へは、そこから人間の船に乗って、更に二日掛けて行く予定だ。

鈴音は小舟の座席に座って、櫂をしまった。そして、最後に緑の島を一目見ようと振り返った。

鈴音は、そこに広がる光景に驚嘆した。

おじさんや、リアン、アンおばさんや、同級生の皆：それだけで

はない。村長に赤鬼達、鬼猪の軍団に友達の鬼鳥も、島中の鬼達が、海岸に何時の間にか集まっている。手を振っている者や、鬼の文字で『いつてらっしやい!』と書かれた幕を掲げている大人達。姿は見えないが太鼓を叩いている者もいるようで、ドンドンと音が聞こえる。

『無事に帰って来いよ!』

リアンの声が出た。鈴音は顔を俯せて涙を着物の袖で拭いた。手が震え、嗚咽が止まらなかった。

『鈴音……』

カインが何か言い掛けて、ケインがそれを制した。鈴音は立ち上がって、今まで出した事のないような大声で叫んだ。

『絶対! 変えてみせるから! 皆が故郷に帰れて、皆が笑顔でいれる世界に!』

鈴音は笑顔で、涙を目に溜めながら、手を振った。

二匹のイルカが泳ぎだす。鈴音は島の姿が見えなくなるまで、手を振り続けた。

6 旅立ちの日（後書き）

第一章は終わりです。第何章まであるんだよって話ですが、それは著者も分かりません……。5章ぐらいかな？うん、やっぱり分かりません。

読んで下さった方、有難うございます。

7 / 帆船の二日

太陽が姿を現してから既に数時間が経つ。雄大な海は波も作らず静かに落ち着いており、天高くから届く太陽の光を反射させて、辺り一面を美しく輝かせていた。

そんな海の中へと、一隻の帆船が小さな島から旅立つ。船は長く使われているのか所々ボロボロで、数十人が乗り合わせられる中型の木造船である。船は帆を高く掲げ、強く吹き付けてくる潮風を受けて、止まることなく南へ南へと進んで行く。小さな島からは、直ぐにその姿が見えなくなった。

「いやあ、オイラはやっと美人な奥さんの所に帰れるよ。」

船に乗っている三十歳代くらいの男達が集団で話しをしている。身なりを気にしない質なのか、無精髭は生やしっぱなし、全員着物は安っぽい使い古された品々で、継ぎ接ぎだらけである。彼等は下流階級の出稼ぎ人達らしい。

「お前の嫁は物の怪だろ。鬼だつて食いやしねえ」

酒を一升瓶で飲んでいる男が言った。三人の煙草を吸っている男達が、下品な笑い声を上げて、その言葉に同意する。

「おおい。そこの兄ちゃんも話そうぜ」

男の内一人が、麦わら帽子を被り、薄い赤色の着物を纏って遠く

を眺めている少女に言った。少女が振り返ると、男たちは驚いて意外そうに声を上げる。

「娘さんじゃねえか。これは悪い。女が乗ってるなんて思わなかったもんで」

「娘さん、これからどこへ行くんだい？ オイラ達の話し相手になつてくれよ」

男達は次々に声を上げるが、少女は妙に慌てて中々口を開けようとしない。

「どうしたんだい？ 一応言つとくが、俺たちには嫁も子供もいる。変な事はしやしないよ」

煙草を吸っていた男達の一人が、頑固そうな顔のわりに優しい口調で言った。彼女はちよつと躊躇ってから頷いて、男達の集団にぎこちなく入る。少女は酒の強い匂いに少し顔をしかめた。

「自己紹介してくれよ、娘さん」

煙草を吸っている男が言った。少女は訛りのあるか細い声で答える。酷く緊張している様子が、声の震えから伝わった。

「す……鈴音と申します。が……外国から来た……旅の者です」

男たちが「へ〜」と感嘆の声を上げた。若い娘が一人で旅をしている事に、感心しているらしい。

鈴音は、自分が話している人間の言葉に間違いがなかったか、気

になつて仕方なかった。

「何して旅しているんだ？ ……衣は見た事ないような生地だな…
…」

「衣は鬼蚕の……いえ、祖国の物です。わ……わたしは一応、薬調
合師をしています」

男たちは再び感心した声を上げる。薬調合には当たり前だが多くの知識が必要だ。例えば薬の材料になる植物やその調合法、また各々の症状にぴつたりと効く薬の種類に関してなど……。目の前にいる娘がそんな知識を身に付けている事に感心しているらしい。ただ、薬調合と言つても鬼人専門だが……。

「薬調合師か……じゃあ先生とは話しが合うかもな。おゝい、先生
や」

男の一人が遠くの方で寝ていた、長身で細身の青年を呼んだ。先生と呼ばれた青年は、外国の医者が着るような白衣を身に付けている。眼鏡を掛けていて、いかにも博学そうだ。鈴音は急いで、「初めまして」と頭を下げた。すると、青年は爽やかな笑顔で言葉を返してくれた。

「初めまして……」

しかし、青年はそこで言葉を止めた。鈴音が困惑して辺りをキョロキョロと見渡していると、青年は呆れた様子で溜め息混じりに続けた。

「……全く、貴男達は朝からお酒なんか飲んで……医者の言う事は

聞いて欲しいね」

医者青年は厳しい声で告げた。男たちは申し訳なさそうに、酒を置いて煙草を捨てた。

「許してください先生。それより、聞いてくださいよ。この子、薬調合師らしいですよ」

青年は男達と同じように感心の声を上げて鈴音を見た。鈴音は緊張して固まっていたが、自己紹介をしなければ失礼だと思い至り、上ずった声で切り出した。

「す……鈴音と申します」

鈴音のぎこちない言葉に、青年は微笑んで言った。

「訛りがあるね。外国の子かな？ それでも黒髪に黒い瞳……両親は太陽国の人みたいだね……」

「生まれは太陽国ですが、育ちは別の国です。久しぶりに、生まれた土地に帰ろうと思ひまして……」

不思議な事に、この医者青年はずっと鈴音を見付めている。あまりに見られ続けるので、鈴音は少し恥ずかしさを覚えて尋ねた。

「あの……どうか、なされましたか？」

青年はハツとして、ずれた眼鏡を調えながら、妙に焦って言った。

「いや、悪いね。何でもないよ。どこかで会った事があるように思

つてね、きつと気のせいさ。僕は医者、椎名文瀨だ。宜しく」

二人は握手をした。最も、鈴音は握手という行為の意味をよく知らないのだが。

船は時に酷く揺れながら、目的地である太陽国へと向かって行く。鈴音は二日間という短い時間の間に、同じ船に乗る皆と親密な仲間になった。同性も同年代の人もいなかったが、皆見聞が広がったし、鈴音は彼等と話すうちに、人間について少しずつ思い出していった。

「鈴音さんは、十年近くぶりに太陽国に入るんだよね」

椎名が茶を飲みながら、太陽国まで残り数時間となった地点で鈴音に尋ねた。

「はい……。どれくらい、変わったのかなあ……」

隣で酒を飲んでいた男がそれを聞いて、酷く酔っ払った口調で話しに入った。どうにもこの人達は酒や煙草がなければ駄目な質らしい。

「それはもう大分変わったように感じるだろうぜ。俺達は一ヶ月に一回、交易島の仕事場から帰ってくるんだけどよ、それだけでも随分と周りが変わったように感じるからな」

それを聞いて鈴音は初めて、船を乗り換える為に寄ったあの島の名前が交易島だと知った。鈴音は自分の頭の中にある想像上の地図に、新ためて知った島の名前を刻もうと、交易島・交易島と頭の中

で何回も繰り返した。その内に椎名が続ける。

「帰ったら、鈴音さんは何をするの？」

鈴音は記憶する作業を中断して、言葉を返した。

「まず、昔住んでいた村に行ってみようと思っています」

話を聞いていたらしい釣りをしていた男達が「それはいい」と口々に言った。

「祭りもあるぜ、今週にな。俺たちはその為に帰ってきたみたいなものだ」

顔を真っ赤にした男が、勢いよく酒を飲みながら愉快そうに話す。

「椎名さんは、何しに行くんですか？」

鈴音は椎名の様子が気になって尋ねた。椎名は「あれ、言ってなかっただけ？」ととぼけた様に話してから、男達から無理やり勧められたお酒を少し飲んで答えた。

「交易島の診療所で、薬が足りなくなつてね。太陽国にしか売っていない薬だから、二日掛けて買いに来たのさ。頭痛に効く苦い薬」

「頭痛ですか……光沢草とか、清水香りの実とか使われていそうですね」

「そうそう、他には痛氷の実とか……。正直薬の事は、詳しく知らないんだけど……」

鈴音は痛氷の実と言う植物の実を知らなかった。人間と鬼人では呼び名が違う物も多々あるのだろう。これから先、人間の世界で生きていく為には、まだまだ学ばなければいけない事が多そうだ。人間の常識が鬼人の常識と食い違う事もあるらしく、この二日で鈴音が男達や椎名に不可思議な顔をされた回数は五十回にも届く勢이었다。

「島が見えたぞー！」

男の声が響いた早朝。帆船は二日間の旅を終え、世界でも有数の巨大な島国に辿り着いた。鈴音は十年ぶりに、自分の生まれた国に帰ってきた事になる。鈴音は海岸をこれでもかと眺めた。そこには幾つもの船が止まっている。帆船や漁船、観光の為に造られた物なのか、とても豪華な客船も海岸に錨を下ろしていた。

鈴音は、たくさんの人間達が生活をしているであろうこの風景に心を震わした。全くそれは当たり前前の事なのだけれど、人がごく普通に生活をしている事が、鈴音は嬉しかったのだ。

「いやはや、これでお別れだね」

椎名が残念そうに呟いた。鈴音は荷物を手に持って、今までの時間を惜しみながら、椎名にだけでなく乗組員全員に向かって言った。

「また、会えますか？」

男達はその言葉を聞いて、照れたり笑ったりした後、口々に鈴音

に向かつて激励の言葉を掛けた。最後に、椎名が鈴音の倍はあろうかという荷物を必死に持ち上げて、必死な表情を無理に笑顔にしようと言った。

「また会えるさ。そう遠くないうちにね」

船が港に着くと、船に乗っていた皆は、笑顔で太陽国に足を踏み入れた。鈴音は、二日ぶりの揺れない地面に少し違和感を感じたが、直ぐに慣れて懐かしの大陸を歩きだした。

鈴音は生まれ故郷、赤坂村へと足を向ける。

8 故郷での再会

太陽国には中心都と呼ばれる広い街がある。その名の通りこの国の中心に位置しており、国王の住む城郭・太陽城が建てられ、中流階級の者から上級階級の者だけが住む事を許されている街衢である。

その中心都から北に数里行くと北側海岸が在り、低流階級の者達の出稼ぎ渡航に多く利用される。鈴音は馬を借りて、北側海岸から村を五つばかり抜けた所にある、懐かしの故郷赤坂村へと向かった。

赤坂村―鈴音が住んでいた当時は、少々有名な土地柄であった。人口数十人の小さな農村だが、昔ながらの伝統や伝説などを非常に大切にしている、ある有名な学者さん曰く 歴史の宝庫 である。とは言っても当時の幼い鈴音は歴史になど全く興味が無く、近所のお爺さんが子供を集めて勉強会を開いていた時も、友達と関係の無い話をして戯れていた。

なので鈴音が赤坂村について知っている事・覚えている事と言ったら、傾斜に建てられた古い家々と大きな田園、澄んだ美しい川や近所の高い山に登って見た赤坂村全体の風景などである。つまりは、目で見た景色ぐらいのものだった。家族や友達と遊んだ時の記憶は勿論鮮明に覚えているが、空しくなるのであまり思い出したくない。

そもそも何故鈴音が故郷に戻ろうと考えたのか、それは覚悟する為であった。自分の家族が村にいない事ぐらいはリアンに話した通り分かってはいるし、生け贄になった筈の自分、つまりはとつくの昔に死んでいる筈の自分が、実は生きていると確認されるのも不味い。覚悟するとは……自分には帰る場所が無いのだと実感することだ。

鈴音は馬を走らせる。走らせている間に、馬と会話が出来ない事に気が付いた。始めの間は（この子は恥ずかしがり屋さんだろうな）とか、（わたしと会話出来る事に気が付いていないのかな？）などと考えていたのだが、何度馬に呼びかけても返事をしない。漸く言葉を返したと思ったら、

「ひひーん」

である。どうやら鈴音の持つ才は、鬼動物と会話出来る であり、全ての言語を理解できる ではないらしい。よく考えてみれば、鈴音は幼い頃、人間の土地で動物と会話をしたことなど無かった。

つまり彼女は慣れない手綱で数時間、馬に揺られて行かなくてはならなくなつたのである。

赤坂村に辿り着いた頃には、鈴音の体はガチガチになつていた。馬から下りるだけでも苦勞したし、気を張りすぎたせいか腰が固まつていて強く痛んだ。歩き方も死人のようにフラフラで、もしその場に人がいたら、鈴音は不審人物の烙印を押されていた事だろう。しかし、懐かしの赤坂村には人の気配が全く無く、昼だというのに薄い霧が立ち込めていて、幽霊でもいるのではないかと錯覚させる有り様だった。

鈴音は馬を馬小屋に置いて（その小屋も蜘蛛の巣だらけで不潔だった。鈴音は一応水だけでも清潔な物を川から汲んできてやった）、妙な歩き方で村を徘徊した。彼女は初め、道を間違えて廃村に来てしまったのだらうかと考えていた。しかし、見覚えのある傾斜に建

てられた家々、澄んだ川や雑草によって支配されたかつての田園地帯、あの赤坂村に間違いない。この十年の間に、伝統や伝説を何百年も守り続けた鈴音の故郷は、廃村になっていた。

鈴音は思わぬ形で帰る場所が無い事を確認した。死んだ村で死んだ筈の自分が歩いているという光景は、傍から見るとさぞ不気味な光景だろう。鈴音は何とも言い表せない気持ちを胸に、かつて自分の家だった建物へと小走りで足を進める。聞こえてくる音は、川のせせらぎと馬小屋においた馬が偶に鳴く声ぐらいであった。

自分の家とその周辺は昔と大して変わっていないかった。ただ、蜘蛛の巣が張り巡らされたり、白蟻にやられたのか所々ボロボロであったりと、時を感じさせる姿ではあったが。

「誰も……いないよね……」

鈴音は一応声を掛けてから、かつては自分の家であった建物の、ボロボロになった戸を二度叩いてみた。当たり前だが鬼人の建物よりも小さく造られていて、鈴音は自分の身長にあっているというのに、その大きさについて違和感を覚えてしまう。

家は思っていた通りもぬけの殻で、昼間だというのに薄暗くて不気味だった。家の中にまで蜘蛛の巣が張ってあったり、御器嚙がうようよしていたりと、中々に酷い状態である。部屋の間取りは全く変わっていないが、家の空気は十年前とはまるで違い、冷え切っていた。

鈴音は何年も掃除されていない埃だらけの汚い床に土足で上がり込むと、廃虚と化した家の隅々まで見渡して、溜め息を付いた。

村人が誰も残っていない理由には既に見当がついている。鈴音の家族は、娘を捧げて得た地位や金を、赤坂村の人間全員に振りまいたのだらう。世話になっていている人達だし、それは常識的で立派な事なのかもしれない。しかし、なんともやり切れない思いである。鈴音は自分を犠牲にして家族が手に入れたもので、皆が幸せになっっているという現実を喜ぶ気にはなれなかった。かと言って彼等が当たり前に持っている、幸せになりたいという願いを忌む事も憚られたのである。

「でも、どうしようもないもの……」

鈴音は淋しい廃墟の中で独り言を呟いた。考えて出した言葉ではなく何時の間にか口に出ていた言葉だった。なので、何がどうしようもないのか自分でもよく理解していない。

「何がどうしようもないのかね？」

不意に背後から低い声が聞こえた。鈴音は人が居る筈はないと決め付けていたので驚いて振り返ると、そこには歳が七十程の、白髪を後ろで一つに束ねている、一風変わった姿の老人が玄関に立っていた。

「物盗りだったのなら運が悪かったの。残念な事に、この村は十年程前に死んでしまったのじゃ。何処の家にも、もう一銭すら残ってはおらんよ」

老人はどうやら鈴音の事を泥棒だと思っているらしい。まあ、土足で人の家に勝手に上がりこんでいるのでそう思われても仕方が無いだらう。鈴音が何と誤魔化そうかおどおどと考えている間に、玄関に立っている老人が、昔よく世話をしてくれていた爺様にそっく

りだと気付いた。いや……そっくりな訳ではない。本人だと思いつた瞬間、勝手に口が動いていた。

「一太郎おじいちゃん……？」

鈴音はハツとして急いで自分の口元に手を当てた。一太郎という名の老人はすつとぼけた表情をして、「何でわしの名前を知っておるのじゃ」と驚いた口調で言った。

(ああ……しまった。なんてわたしは馬鹿なのだろう……)

後悔しても遅かった。一太郎はどこかであったことがあるだろうかと自分の記憶を辿っている様で、自分の顎に手を当てて考え込んでいる。鈴音は自分の体から冷たい汗が出てくるのを感じた。生け贄にされた自分が生きている……これが国に広まれば、鬼人と手を取り合おうなど言う間もなく捕らえられて、サクツと死罪にされるだろう。

一太郎が「うーむ」と唸ると、鈴音はビクツとして体をすくめた。そして結局、一太郎は思い出せなかった……というよりは気が付かなかったようで、鈴音に向かって尋ねた。

「会ったことがあるかね？ すまぬがわしは思い出せぬ」

鈴音は安堵の息をつき、正体がばれなかった事でこれから先に対して少々自身を持った。そして物盗りと勘違いされたままでは悪いと思って、正体に気付かれないようわざと訛りを強くして言った。

「おじいさん、わたしは旅の者です。今までに会ったことはない筈です。それに、わたしは盗人なんかじゃありません。今晚泊まれる

場所が無いか、探していただけなのです」

一太郎は「ほう、お主の様な若い娘が」と感心した様に言った。鈴音は誤解が解けた事を喜ばしく思い、また一太郎に会えた事で嬉しくなった。しかし喜びの言葉は口にせず、心の中で静かに呟いた。

(おじいちゃん……また会えて良かった。でも、ごめんなさい……)

鈴音は、この村から去らなければと家を出る為に玄関へ戻った。一太郎はずっとその場に突っ立っているが、鈴音はそもそも彼は何故この村に残っているのだろうかと思議に思った。それに彼は、何故今は廃墟となった、彼に言わせれば一銭も落ちていないようなわたしの家に来たのだろうか……？ そんな事を考えているうちに、一太郎は愛想のいい笑顔で鈴音に呼びかけた。

「勘違いした侘びじゃ。今日はわしの家に泊まるのか？ ここから直ぐじゃし、今日は元々客が来る予定だったのでな、客人が来ても恥ずかしくない程度には片付けてある。ふむ、そうしよう、それがいい」

鈴音は足を止めて、一太郎を見た。

9 感謝の告白

暗い林道を抜けた村外れにある茅葺の家。昔はその家をお化け屋敷だと言って、近づく事も躊躇っていたものだ。何故ならば周りは背の高い木々に囲まれていて、昼間であろうと薄暗く、建てられてから相当な年月が経っているの、外装がボロボロだったからだ。

鈴音が最初にこの家へと立ち寄ったのは、まだ三、四歳の幼い頃だった。冒険と称して友達と村を散策していると、村の外れに古い家を見付けたのである。あんなボロボロの家に誰が住んでいるのかと帰ってから母に尋ねたところ、母は明るく「素晴らしい人が住んでいるのよ」とだけ答えた。鈴音は、幽霊屋敷の主人が素晴らしい人だなんて悪い冗談を言われたのだと思い、夜中にこっそりと家を抜けだして、友達数人と幽霊屋敷へ向かった。

明かりのない暗い山林を通り抜ける事には恐ろしさを感じたけれども、好奇心のほうが勝っていた。そうしてお化け屋敷の戸を叩き（皆が恐れたので鈴音が代表して叩くことになった）、鈴音は真剣な表情・真剣な声音で挨拶をした。

「お化けさん、お化けさん。あなたは良いお化けさんですか？」

そうすると寝巻き姿の老夫婦がクスクスと笑いながら戸をゆつくりと開けた。小さな子供達が二人を恐れて蒼白な表情で見上げていると、その当時から白髪を後ろで一つに縛っていた彼が小さな声で脅かすように言った。

「いいや、悪いお化けさんじゃ」

鈴音は家から持ってきた数珠をジャラジャラさせて「南無阿弥陀仏！」だの「南無法蓮華鏡！」だの適当にそれっぽい言葉を並べてみたが、恐ろしい事に老夫婦は笑って鈴音の頭を撫でてきたのである。

その老夫婦こそが古瀬一太郎と、当時はまだ健在だった彼の妻、古瀬おたつであった。

彼の古い家は外装も内装もまるで変わっていない。家の中にある外国の珍品やその配置、流れる空気までもが昔から変わっていないようだ。鈴音はこの時漸く、懐かしい故郷へと帰ってきたのだと実感した。

「そんなに珍しいかの？」

鈴音があまりにも家の中をキョロキョロと見渡すものだから、一太郎が可笑しそうに言った。

鈴音は結局、一太郎の家に今晚は泊まらせて頂くことになった。一太郎の誘いを断り切れなかったということも無くは無いが、一太郎ともっと話したいという欲求に負けた事のほうが大きい。彼は博学で見聞も広く、知らない事は無いんじゃないだろうかという印象を抱く程に知識が豊富だった。話せば得るものも多いはずだし、何より十年振りの再会なのだ。会って直ぐさよならでは淋しい。

まず、一番気になっていた事柄を尋ねることにした。鈴音は一太郎が出してくれたお茶を頂いて（何が入っているのか、お茶にはほ

んのりとした柑橘系の甘味があった)、体を温めてからゆっくりと切り出した。

「あの……この村、赤坂村は昔から伝統を重んじてきた事で有名な古い村でしょう？ 何故、住人を一太郎さんしか見かけないのでしょうか？」

一太郎はその問いに「ふーむ」と何か迷うように唸ってから、自分の分のお茶を一杯飲んで答えた。

「そうじゃの、さぞ驚いた事であろう。その話しをするにはまず、生け贄の制度について話す必要がある」

このタイミングで生け贄の制度が出てくるということは、大よそ鈴音が予測した通りの展開がおこったのだろう。事実、大半は予想した通りだったが一部は予期していなかった。

「生け贄は百年に一度の期間で、ある孤独な無人島に…… 神住み島 と言う名じゃが……とにかく、そこに娘を一人置いて行くという残酷なものじゃ。その娘の家族には莫大な名誉と恩賞金が支払われるのでな、皆がこぞって申し込む」

申し込む……？ 鈴音は、聞かされていた話と違っているか、自分の事だというのに酷く冷静に考えた。生け贄は国王が見定めた国中の臣民から選ばれる筈ではなかったのか……。申し込むという事は、家族が娘の命を見返り欲しさに捧げたという事ではないか。そして、つまりはそれが自分だったという事になる。

「最終的には申し込んだ者の中から国王が選んだ者が犠牲になるのじゃが、その際の恩賞というのは家族だけではなくその娘の出身村

にも、家族の許可があれば渡す事が出来るのじゃ。もう、分かるじやろう。この赤坂村にはかつて若い娘が生け贄に捧げられた。その娘の犠牲によつて、彼らは上流地区に引越したのじゃ。……どうかしたかの？」

一太郎はぐつたりとしている鈴音に向かって言った。鈴音は「いえ……何でも」と力なく返したが、何でも無いわけが無い。鈴音は、想像していたよりも人間は残酷なんだ、と悲しく思った。

鈴音は体に力が湧いてこなかった。全ては偶然ではなく必然だったのだ。わたしは家族に一度殺された身で、国に一度殺された訳でもあるのか……。驚きや悲しみといった感情よりも脱力感の方が大きかった。人は自分の幸せの為になら愛情をバツサリと切り捨てられるのか。それともわたしは家族に……。愛されていなかったのだろうか？ 生け贄の日に見せた母の涙は何だったのだろうか。

「まあ、楽しい話ではないのう……」

一太郎がもう一度お茶を飲みながら言った。そして鈴音はハツとした。何故おじいちゃんはこの村に残っているのだらう。村人全員に与えられた筈である国からの恩賞を、彼はどうしたのだらう？ 疑問に感じたときには口に付いて出ていた。

「一太郎さんは、何故この村に残っておいでなのですか？」

一太郎は湯飲みを机に置いて（気のせいか涙ぐんでいるように見える）、言った。

「その娘とわしは知り合いでの。まあ狭い村じゃから当たり前のことと言えば当たり前なのじゃが。その子の犠牲から生まれた物で、

「どうやって幸せになれると言うのじゃ」

鈴音は顔を上げた。一太郎は真剣な表情で続ける。

「犠牲で幸せになるというのは、確かに世の中の心理であろう。人間の進化は犠牲を学び、犠牲に学んだ為の成果じゃ。だからこそわしは村人達がどんな暮らしをしようが到底構わぬ。腹立たしい事ではあるが、あの子の犠牲を忘れて生きていくのもよしとしよう」

「じゃがわしはそうならぬ。あの子の顔を忘れぬ、名を忘れぬ、笑顔を忘れぬ。どうせ残り短い人生じゃ。せめて少しでもあの子に報いたい。十年間そうして暮らしてきたが微塵も後悔はしておらぬ」

一太郎は続けて一気に言った。鈴音は、何故一太郎が廃墟となつた鈴音の家に来ていたのか漸く分かった。おそらく毎日通っているのだらう。楽に生きる事よりも大切な何かがあるのではないかと、一太郎は考えてここに留まり続けているのだ。

そして、それは何よりもその娘の為、鈴音の為を思つての事なのである。

（おじいちゃん、わたしは生まれ変わったんです……。家族から与えられた昔の名前を捨てて、レインおじさんに付けてもらった名前を名乗り、人間としても鬼人としても生きながら……）

鈴音は暗い気持ちを振り払って優しい口調で切り出した。それは一太郎に対しての感謝の気持ちでもあつたし、それよりも大きな気持ち、この人に幸せになつてほしいという思いからだつた。

「もし……わたしがその娘だつたら……」

一太郎が不思議そうに鈴音の顔を見詰め直す。そこに懐かしい娘の顔を見たのか、一太郎は一瞬驚いた表情をした。

「それほどわたしを思ってくれているアナタに、幸せになっただけと願うでしょう。過去の柵からぬけて、理屈なんか抜きで、ただただ、幸せになって下さいと願うでしょう」

「お主……?」

鈴音は目に涙を溜めながら、一太郎に笑顔に向けた。心の底から溢れ出た笑顔だった。正体がばれても、わたしが生きている事を隠して、この人をこれ以上苦しめたくない。

「わたしは鈴音って言います。でも、昔呼ばれていた名前とは違います。わたしは綾乃。音無綾乃って言う名前でした」

鈴音は妙に照れくさくなったが、一太郎は、何を突然言うのかと首を横にゆっくりと振った。

「うん、久しぶり……一太郎おじいちゃん」

一太郎はその呼び方にドキツとしたようで、ジツと鈴音の瞳の中を覗き込むようにして見た。そしてもう一度首を振ると、恐る恐るといった口調で言った。

「まさか……」

10 鬼人と人間

鈴音はそれから十年間の出来事を全て一太郎に話した。鬼人に救われ、鬼達と共に育った事、そして自分の夢の事も……一太郎は複雑な表情をしていたが、最後まで口を一切挟まずに、黙って話しを聞いてくれた。鈴音は話し終えてから、辺りがすっかり暗くなっている事に気が付いた。

「綾乃……いや、鈴音。この事は誰にも告げてはならん。わしに話すべきでもなかった」

一太郎が厳しい声音で鈴音に告げた。鈴音はこくりと頷いたが、後悔はしていなかった。話す必要があると強く感じたのだ。一太郎も鈴音の気持ちを理解してくれたようだし、だからこそその警告なのだろう。

二人共が暫く口を開かないでいると、一太郎が急に力なく崩れた。鈴音は驚き、急いで一太郎に駆け寄って彼の細い身体を支えたが、その必要は無かったようだ。一太郎は瞼を押さえて頻りに、

「良かった……良かった」

と涙声で呟いていた。鈴音は、そんな一太郎の様子を見て心が温かくなり、笑顔で「はい」と元氣よく答えた。

「うむ……しかし、喜んでばかりもおられぬ。どうしてお主は、其れ程までにその夢を望む？ お主にとつては、そのまま鬼人と共に過ごしていた方が、幸せであったじゃろう」

一 太郎は最後に優しく、「そのお蔭でわしは生きる希望を持ち直せたがの」と付け加えて言った。鈴音はううんと首を振って、鈴音としてではなく昔の自分、音無綾乃として明るく話した。

「わたし、たくさん経験をしました。それで気が付いたの。人も鬼人も大きな違いは無いって。お互い歩み寄れない状態が続いているけれど、少し流れが変われば、直ぐに仲良くなれる筈だって」

一 太郎は納得出来ないようだった。というより、鈴音の夢は到底誰にも理解することは出来ないのかも知れない。何故ならば、今生きている人間も鬼人も、お互いが敵であるという事は、口を挟む必要すら無い程に常識的な事なのだから。

一 太郎は言い泥んでいる様で、口をモゴモゴさせていた。鈴音が首を傾げると、彼は話す決心が付いたらしく、鈴音を真つ直ぐに見詰めて言った。

「綾乃。お主、人間と鬼人の関係をどれぐらい知っておる？」

鈴音は綾乃と呼ばれて少し困惑しつつも、顔には一切戸惑いは出さずに、一太郎の質問に答えた。鬼人と人間の関係についての知識はたくさん持っている。学び舎での歴史の試験は常に満点だったし、昔はよくレインおじさんや村長の書物庫に勝手に入り込んで歴史書を読み漁ったりしたものだ（勿論、後でこっぴどく叱られた）。

「二百年前から鬼人と人間の交流は始まり、両者は良い関係を築いていました。お互いの知識を交換したり、物質の輸出入も頻繁に行われました。今では数多くの国々が立てられたオールドビスと呼ばれる巨大大陸に鬼の種族達は暮らしていましたが、人間はオールドビス大陸にあるたくさん資源が欲しくなり、鬼人を追い出そうとしま

した。当然、それから二つの種族は関係を悪くします」

「結局、種族間の争いは増大して行き、最後には百年にも及ぶ戦乱が起こりました。つい三十年前まで行われていた、大きな戦争です。戦争には人間が勝利し、鬼の種族は大規模な引越しを行いました。この大きな争いの事を 百年戦争 と言います。鬼人・人間の犠牲者を合わせると、計二億人……」

鈴音は暗記していた事柄をスラスラと述べた。一太郎は、鈴音が話し終えた途端に、これまたスラスラと話し出した。

「しかし、鬼人の一部には戦争の敗北を認めたくない者達がいまいた。彼等は人間の世界でひっそりとくらししており時折、世界の各地で組織的暴力を引き起こします。彼等は 人喰らい と呼ばれ、世界中の人々から恐れられています。彼らが引き起こした組織的暴力による犠牲者は、延べ数百万人にも上ります」

一太郎が話し終えた頃には、鈴音の顔色は真つ青になっていた。鬼人が人間を今でも殺し続けている……そんな話しは初耳だ。争い合っていたのは、昔の話ではなかったのか……？ 信じられない気持ちだった。

「信じられぬか？ しかし事実じゃ。そう、事実じゃよ綾乃。お主の夢は、非常に難しい。百年戦争後、共通の敵を無くした世界中の国々はバラバラになった。その上 人喰らい じゃ。組織的暴力の狙いはお主と同じかも知れぬが、やり方に問題がある。人間達は……わしもじゃが、鬼人に偏見を持っておる」

鈴音は俯いて言い淀んだ。世界は思っていたよりもややこしくて難しい。自分の見聞の狭さに歯痒さを感じた。そして同時に、心の

底で悔しく思った。仲良くする事は……こんなにも難しい事なのだろうか？

「それでも、わたしは……」

鈴音が呟いたところで、一太郎が頷きながら、自分の細い腕を上げて制した。

「綾乃、人を学ぶのじゃ。鬼人については誰よりもよく知っておるじやろうが、人間は非常に複雑じゃ。丁度、人を学ぶには良い機会がある」

鈴音が、一太郎の言葉を上手く飲み込めないでいると、誰かがこの家を訪ねて来たらしく、戸をコンコンと叩く音が聞こえた。こんな時間に、この廃村の外れに誰が来たのだろうか？

一太郎は「来たかの」と言って玄関に向かった。鈴音は、一太郎に泊まるよう勧められた際に「今日は客人が来る予定だ」と言っていたのを思い出した。

「遅かったの」

「そう言わないで下さい。それでも急いで来たのですから」

鈴音は思った。あれ？ この声には聞き覚えがある。客人は一太郎に案内されて、鈴音のいる客間まで足早にやって来た。客人は鈴音を・鈴音は客人を見かけると、同時に「あっ！」と叫んだ。

「鈴音さん!？」

「椎名さん!？」

お互いに顔を見合わせてから一瞬間を置いて、同時に笑った。一太郎が「何じゃ? 知り合いか?」と惚けたように尋ねたが、鈴音はこんな偶然があるものなのかと可笑しくて、一太郎の問いに答える事が出来ずに、笑い続けた。

椎名がようやく笑い止んで、それから言った。

「いやあ、直ぐに会えるとは言ったけれど、その日のうちにまた会うとはねえ」

鈴音も笑い止んで、目に浮かんだ涙を拭ってから言葉を返した。

「本当に、凄い偶然ですね」

一太郎は一人だけ置いていかれたような気分を味わっていたらしいが、椎名が帆船で出会ったのだと説明すると、これはむしろ都合だと言って笑った。

「各々不思議がっているじゃろうが、まあ綾……鈴音、わしと文瀬は親戚なのじゃよ。文瀬、わしとこの子は昔からの知り合いじゃ」
「成る程。いやね、鈴音さんと初めて会ったときに、どうもこの子には見覚えがあると思ったんですよ。昔この村で、面識はなくとも会っていたのかもね」

鈴音は少しドキツとしてから頷いた。椎名は愉快そうに未だ笑顔のままだ。一太郎は「ふむ」と呟いてから、年長者らしく中心となつて話し始めた。

「今日は全く良き日じゃ。もう夜は遅いが、三人で楽しく飲もうかの」

とは言っても、椎名は酒をほとんど飲めず、鈴音は人間の酒と言うものを始めて飲んだが、どうにも舌に合わなかった。なので結局一太郎が、一人で酒を寂しそうに飲んでいた。

鈴音は楽しい夜を久しぶりに経験して、とても愉快的気分になった。

眠る直前、鈴音は湯浴みをした後、一太郎から与えられた六畳ほどの一室に寝転がっていた。今日はたくさんの出来事があったなあ………と思い返す。

(悲しい事実も知ったけれど、楽しい事もたくさんあった。でも、人喰らいとはこの先、何かがありそうな予感がする……)

静寂な廃村の古ぼけた家で、鈴音は静かに眠りに着いた。

10 鬼人と人間（後書き）

第十話です。いやあ、何事にも飽き易い自分が二ヶ月間小説を書き続けているのは、何だかんだで進歩と言ってもいいですかねえ。

いや、作者はアクセス数一でも喜ぶような奴ですので、やはり皆様のおかげです。皆様がチラッと覗くだけでも作者はモチベーションが上がる上がる。

これからも宜しくお願いします。

11 朝霧の中で

翌朝、鈴音はまだ肌寒い部屋の中で眠たそうに眼を擦りながら、鬼蚕の糸で仕立てた赤い着物に着替えて足袋を履き、まだほんのりと薄暗い外へと向かった。外は深い霧がかかっている、ほんの数歩前すら見えなくなっている。鈴音は振り返って、一晩過ごした茅葺の家をもう一度見た。やはり外装がボロボロだったが、それでもそれがあの人らしいなあと、鈴音は微笑ましく感じた。

「こんな朝早くに起きるとは感心じゃな」

いきなり背後から声を掛けられ、鈴音は驚いて振り返った。そこには一太郎が寝巻きのまま、しかし既に髪は後ろで一つに縛って、玄関の前に置かれた長椅子の上に佇んでいる。鈴音は一太郎に微笑みかけて、彼の隣にゆっくりと腰を下ろした。

「鬼人の朝は早いから、もう癖が付いてしまったの」

鈴音は林道の遠くを眺めながら（ただし今は霧しか見えない）、一太郎に向かって話した。一太郎は聞いているのか聞いていないのか曖昧な返事をして、霧しか見えない筈なのにどこか遠くを眺めている。

「椎名さんは？」

鈴音が尋ねると、一太郎は「まだ寝とるよ」と答えた。それから、日が昇り始めたばかりの空を見上げて、鈴音に静かな調子で尋ねた。

「お主は、どの程度覚えておる？　――人間の事を」

冷たい風が吹き、一太郎の家を囲む背の高い木々が揺れる。鈴音は落ちてくる葉の様子を何となく眺めながら、目に掛かった髪を横に掻き分けて、そっと呟くように答えた。

「正直に言つて、ほとんど覚えていないの……」

一太郎は頷いて「そうじゃろうとも」と優しく言った。一太郎と話していると、鈴音は不思議な気持ちになる。ずっと昔に別れた人と当たり前のように話しているのは、なんだか夢のようだ。別れたばかりの幼い頃は何度も夢に見たり、心の中で思い描いたりした事柄なのだから、仕方の無い事だろう。

「あの日から十年も経つのじゃ。十年……子供が育つ期間では最も大切な時期じゃろう。それでも驚く程に綾乃、お主は変わっていない。誰よりも正義感が強く、優しく、誰かが争い合う姿を黙って見ていられないという性格がの。勿論、容姿は美しくなったとも」

一太郎が昔を懐かしむように目を細めながら呟くと、鈴音はクスツと笑つてから言葉を返した。

「おじいちゃんは、どっこも変わっていないよ」

一太郎が可笑しそうに微笑んで「そうかの？」と尋ねると、鈴音も微笑んで「そうだよ」と返した。しばらくそうして二人で笑っていると、椎名が起きたのか、家の中から床を歩く音が聞こえた。その音を聞いた為なのか、一太郎は表情を引き締めて話題を変えた。

「さて、綾乃。お主は人を学ばなければならぬ。その為にはやはり人が多く住む場所に行くべきじゃ。こんな廃れた村ではなくての。」

その絶好の機会が丁度ある」

鈴音は椎名が一太郎の家に訪ねて来る前にも、一太郎が同じような話しをしていた事を思い出した。絶好の機会……そうだ、帆船でお酒を毎日飲んでいたおじさんが言っていた、あの事だろうか？

「お祭り……？」

鈴音の言葉に、一太郎は少し驚いた表情を浮かべ、コクリと頷いて言った。

「そうじゃ。祭り……どちらにしても知る事じゃろうから先に言っておくが、生け贄祭と呼ばれる祭りじゃ。生け贄の制度が生まれて六百年、その間に捧げられた七人の娘を、祀っておる」

一太郎は言い辛そうに告げた。鈴音は心底驚いていたが表情には出さないようにして、頷いてから僅かに震える声で尋ねた。

「と言う事は……」

「うむ……お主も祭られておる」

一太郎は鈴音の言葉を引き継ぎ言った。予想通りだった。自分が神仏のように祭られているというのは変な話だが、そんな予感はしていたのだ。一太郎が続けて言った。

「祭りが行われるのは中心都。その日だけは下流階級の人間でもあの地区に入る事が出来る訳じゃが問題がある。お主が祭りに行くとしたら、中心都に入る事になる。つまり……」

「赤坂村の人々に出会うかも知れない……もしかしたら、家族にも」
今度は鈴音が一太郎の言葉を引き継いだ。一太郎が頷くと、鈴音はいきなり笑顔になって言った。

「大丈夫だよ。絶対にばれないから……」

鈴音は、一太郎がそんな事を心配している訳では無いと百も承知だった。それでもあえてそう答えたのは、自分の心の中に漂っている靄を誤魔化すためである。そんな鈴音の様子を察してか、一太郎も無理に作つたらしい微笑で「そうじゃな」と返してくれた。

霧は晴れ、深緑の葉の間から差す明るい太陽の木漏れ日が、二人を照らした。

朝の食卓についた三人は取り留めの無い話をして、鈴音はその際にまた椎名にポカンとした表情をされた。それが、朝食に出された鮭という魚を、鈴音が物珍しそうにジロジロ眺めたうち不安そうにそれを食べたからである。椎名と打って変わって一太郎は孫を見るような目でその様子を見て微笑んでいた。

「文瀬、鈴音さんを中心都の祭りに連れて行ってやるのじゃ」

朝食を食べ終えて三人で片付けをしていると、一太郎が唐突に言った。椎名は皿を桶に汲んだ井戸水で洗っていたところ、手を止め、一考してから言った。

「中心都には用が出来たので、鈴音さんを祭りに連れていく事は出

来ます。でも、中心都を一緒に回するには用を済ましてからでないといけませんから、何時になるか分かりませんよ」

鈴音は一太郎が自分の様子を伺っていることに気付き、皿を布で拭く作業を止めて頭を下げた。

「宜しく願います」

鈴音の言葉に椎名はニコリと微笑んで作業を再開した。そこで鈴音は好奇心が疼いた。

（椎名さんの用って何なのだろう。お薬を買う事だろうか……？でもそれだったら何時終わるかぐらい直ぐに分かりそうな物だけだ……）

気になり始めると黙っていられなくなり、鈴音は結局数分も経たない内にまた椎名に尋ねた。

「椎名さんの用事って何ですか？もしわたしに出来る事ならば、お手伝いさせて頂きます」

鈴音の問いに一太郎も同意して、「わしも聞いてみたいの」と面白そうに言った。椎名はしばらく黙って皿を洗い続けていたが、遂に二人の興味津々な視線に耐えられなくなったのか、自分も含めて三人以外誰かがいる筈も無いのに辺りを確認して、真剣な声で言った。

「いいですか、これは秘密ですよ。僕の友人に動物の医者がいます……名を清丸と言うんですが……とにかく彼が今治療している動物がね、ちょっと珍しい奴でして。祭りで見世物にするらしいのですが

随分弱っているらしくてねえ……様子を見てくれないかと頼まれたのですよ」

「ほう……して、その動物とは？」

一太郎が顎に手を当てて興味深そうに言った。鈴音も気になって椎名の様子を見てみると、彼は「驚かないで下さいよ」と前置いてから、もう一度周りを見回す無意味な動作をした後に言った。

「鬼熊です。背丈は何と二間一尺（約4m）！」

一太郎が驚いて声を上げている中、鈴音は目を開いて固まっていた。鬼……？ 何故鬼が……それも凶暴で有名な鬼熊なんか捕らえられているのだろうか？ 学び舎で習った鬼熊の恐ろしさは、深く心に刻まれている。

「鬼熊は世界でも有数の危険な生物だ。唯一赤鬼だけが彼等を止める術を知っているが（ロラン達がニヤニヤと笑った）、え、決して油断しない事。まあ、この島には数える程しか生息していないんだけどな。それでも今から話す事例は全て実際に起きた事件であり-

」

「大丈夫だよ鈴音さん。さっきも言ったけれど鬼熊はとても弱っているし、頑丈な檻に王直属の兵まで付いてるんだから」

鈴音が鬼熊についての話しを思い出していると、椎名が心配をしてくれたのか優しい言葉を掛けてくれた。鈴音はハツとして、心配を掛けない様に「すみません、大丈夫です」と無理に笑って言った。

そうだ、あれは先生の話だ。実際会って会話を出来る事が出たの

ならば、話のわかる鬼の種族かも知れない……。偏見で嫌うなんて酷い話だ。

鈴音があれこれと考えている間に一太郎が切り出した。

「さて、片付けも終わった。おぬし達、中心都に行く準備をするのじゃ」

12 向かうべき土地へ

鈴音は中心都に一度だけ訪れた事がある。それは生け贄の日の当日、母に赤い高価な衣を着させられ、家族と友人とに別れを告げた翌日の事である。

鈴音は、生け贄に選ばれた娘を中心都に運ぶ為に用意された豪華な馬車に乗せられて、同乗した国王の直属護衛兵達に取り囲まれながら、赤坂村から中心都へと一日掛けてやって来た。馬車の中では静かにするように促されて、護衛兵達の哀れみを含んだ同情の視線を何時間も受けながら、鈴音は自分の運命を一人で悲しんでいた。ただ、家の誇りを守る為にと、涙は流さなかった。

侵入者を拒む巨大な堀から大きな木の橋で中心都に入り、見えてきたその大きな町並みと人間の数に圧倒された。立ち並ぶ家々も地面も壁も、全て石のような物で出来ている。鈴音と唯一口を聞いてくれた護衛兵の話によると（基本的に護衛兵は生け贄と話す事を禁じられていた）、これ等は粘土と砂と石灰を窯に入れて焼き固めた煉瓦と言う物らしい。鈴音は固い地面に違和感を覚えながら、木々が一本も生えていない、全く自然の無いこの街を、寂しい所だと思っ

「準備は出来たかの？」

一太郎が鈴音の様子を見に客間までやって来て言った。鈴音は小さな青い袋に人間の世界のお金（交易島で薬草を売って得た物）と数種類の薬を入れて立ち上がり、頷いた。

「何かあったら文瀬に尋ねるといい。ああ見えて優秀で頼りになる男じゃ」

鈴音はもう一度頷いて袋を懐に仕舞うと、一太郎を真つ直ぐに見詰め、思いを込めて言った。

「おじいちゃん、もう一度会えて、わたし本当に嬉しかった。ううん……何て言ったら、この気持ちを伝えられるのか分からないけど……とにかく、本当に有難う……」

鈴音の言葉に一太郎は微笑んで頷き、十年前、初めて出会った時のように鈴音の頭を優しく撫でた。そしてどこか遠くを眺めるような目をして、深い声音で言った。

「もう、すっかり伝わっておるとも」

鈴音もニツコリと微笑んだ。とても暖かな空気が流れている、そんな感覚に心を洗われた。

鈴音と椎名、そして一太郎は三人で林道を抜け、草臥れた馬小屋まで歩いた。鈴音が借りた馬と椎名が乗ってきた馬が、二匹並んで仲良さそうに水を飲んでいる。鈴音は馬に乗り、これから一日この子に頑張つて貰わなければならないので、応援と感謝の意を込めて頭を優しく撫でた。

椎名は一度馬に乗るのに失敗して頭から転げ落ちていたが、ずれた眼鏡を直して自分で大笑いしていた。先までは心配していた鈴音

も、一人で笑っている椎名の様子が可笑しくてつい笑ってしまった。

「さて、二人とも気をつけるのじゃよ」

一太郎が特に椎名を見て言うと、椎名は「大丈夫ですって」と誤魔化しの笑いを作って言った。しかし、鈴音の様子を見て直ぐにその笑いを引つ込めた。先程まで一緒に笑っていた鈴音が、無表情に一太郎を見詰めていたからだ。一太郎が困ったように首を傾げると、鈴音は表情を変えずに震える声で尋ねた。

「おじいさん……また……来ても……いいでしょうか？」

鈴音の言葉を聞き、一太郎は優しい笑みを浮かべてから答えた。

「勿論じゃ。何時でもおいで」

一太郎に別れを告げて、二人は中心都へと馬を走らせる。

数時間走っては休憩を取り、それを繰り返して少しずつ中心都へと近付いていく。季節は春で温かな陽気が二人を包む……とはいかなかった。途中で雨が降ったり雷が鳴ったりと天候は最悪だったのだ。ただでさえ滅多に馬に乗らない二人は体力を相当奪われ、くたくたになりながらも本日五度目の休憩を取る。辺りは薄暗くなり、もう今晚泊まる宿を探さねばならなくなった。

「いや〜しかし疲れるね〜歳をとると体が直ぐに疲れてしまうよ」

椎名が河原の芝生地帯で寝っ転がって言った。鈴音は澄んだ河に

泳ぐ魚を眺めて、雨に濡れた髪を掻き上げながらふと疑問に思った事を尋ねた。

「そういえば、椎名さんってお幾つなんですか？」

「もう三十さ。百年戦争が終わった歳に生まれたって事だね」

三十！？ と鈴音は叫びそうになり慌てて自分で口に手を当てて制した。まだ二十台前半もいいところだろうと考えていたので、些か衝撃だったのだ。随分と若く見えるなあ……と感心した。

「鈴音さんは？」

椎名に尋ねられて、鈴音は「十六です」と答えた。椎名は「若いってのはいいねえ」と言った後に、「あつ、女性に年齢を聞くのは失礼だったかな」と小さな声で呟いた。鈴音は何故失礼に当たるのかさっぱり分からなかったが、人間の世界では常識なのだろうと自分で了解して、何も尋ねなかった。

「さて、次の里まで行くのか。花宮村……中心都の近くで旅館があるし、今日はそこに泊まるとしよう」

椎名の言葉に鈴音は頷き、立ち上がったって再び馬に乗った。

花宮村に辿り着いた頃には辺りはすっかり暗くなり、鈴音の体も限界に来ていた。首と腰とお尻が強張っていて痛い……。それは椎名も同じらしく、馬を小屋に置いた後は痛みに呻きながら旅館を探した。

花宮村は一軒一軒が遠く離れた箇所に建てられており、かなり広い土地である。それ故、今の二人には地獄の旅館探しとなってしまう。残念ながら努力の甲斐もなく、三軒ある内の二軒は客室いっぱいであり、残るは馬小屋から一番離れた場所にある旅館だけとなった。

「ごめんくださーい」

椎名が疲れ切った声音で挨拶した。旅館 みやさわ はかなり豪華な外装をしており、部屋が空いているとは考えられなかった。それでも春の寒空に寝るわけにもいかず（そもそもそんな体力も残っておらず）、僅かな希望を胸にやって来たのだ。

「お客さんかい？ ヒツヒツヒツ。いらっしやーい」

出迎えてくれたのは六十歳台ぐらいのおばあさんだ。もの凄く甲高い声をしていて、笑い声も不気味である。そこで鈴音は気付いた。恐らく椎名もほとんど同時に気付いたのだろう。旅館 みやさわ は外装や玄関までは立派だが、内装は廃旅館のように草臥れている。

「すみません……二人……空いてま……」

椎名が言い掛けたところで、おばさんが目にも止まらぬ素早さで新聞紙を丸めて、床を叩いた。見事な技である。床には御器嚙二匹が、おばさんの手に持つ新聞紙によって絶命していた。

「え？ 二人？ お二人さんかい？ 空いてるよ……空いてるよ。ヒツヒツヒツ」

鈴音は呆気にとられておばさんを見ていた。今までこんなに変わ

つた人を、例え鬼人を含めても見た事が無い。金縛りにあつたかのように動かない二人を見て、おばあさんが頭を滅茶苦茶に搔きながら甲高い声で続けた。

「わては……そう、旅館…… みや ……何だったけかな？ まあいいや。その女将……お千代だよ。ヒッヒッヒッ……ヒッヒッヒッ」

椎名はお千代の笑いに顔を引き攣らしている。鈴音は会話をしながらも椎名の気持ちがかかった。今晚ここに泊まるのは止めにした方が良さそうだ。鈴音は出来るだけ自然に振る舞って言おうとしたが、僅かに声が上ずってしまった。しかし、それでも構わずに話した。

「すみません、お千代さん。わたし達やっぱり別の……」

その時、強く眩しい光と共に大きな雷鳴が轟いた。しばらくしてから激しい雨が降り出し、パラパラという大きな雨音と、土の匂いが旅館の中に漂ってきた。

「外に泊まるのは……よした方がいいよ……。黒焦げになりたくないけりやねえ……ヒッヒッヒッ」

鈴音と椎名は雷の光で怪しく光り、妖怪の様になってしまっているお千代から眼を背けられなかった。

「さあ……さあ……お二人とも……こちらへ……ヒッヒッヒッ」

床の軋む音が、妙に大きく旅館内に響き渡る。

13 寂れた旅館

鈴音が両親と別れてから既に十年が経つ。その長い年月の間に、鈴音の両親に関する記憶は随分と不確かで頼りない物となってしまう。母は優しくかった……父は規律に厳しい人であった……それ等の僅かな印象だけである。ほんの微かな思い出が残ってはいても、敢えて頭に浮かべる事はせず、そんな事を繰り返している間に、両親は記憶の何処か遠いところに行ってしまった。

「親はね、子供の事だけを考えていればいいの。勿論わたし達は、お兄ちゃんとアナタの事を、何よりも一番大切に思っているわ……」

鈴音が父にちよつとした事で叱られて泣いていた時、母が慰めの為に言ってくれた言葉だ。一番大切に思っている……今となっては、全く信頼できない言葉となってしまった。

両親は名誉や恩賞の為だけに、娘を生け贄へと差し出したのだから。

「人が見掛けによらないつてのは本当らしいね」

畳も壁も至る所が傷だらけのボロボロな一室で、椎名がお茶を飲みながら言った。お茶は みやさわ 特別製の物であると、お千代が不気味に笑いながら持って来た物である。独特の強い渋みがあり最初のうちは飲んでいて辛い、そのうちに渋みに慣れ、癖になつてくるといふ変わった味だ。

「机も湯飲みも丁寧に磨かれているし、部屋も掃除はしっかりしてあるし……」

椎名が部屋を見渡してしみじみと続けた。部屋は襖に仕切られた十畳程の室である。

鈴音は顔を顰めながら渋いお茶を一口飲んで、一息付いてから、机を挟んで疲れた様子で話す椎名に向かって笑顔で言った。

「本当ですね……やっぱり、第一印象で人を決め付けては駄目って事ですね」

二人の話題は勿論、お千代の事である。お千代はその奇妙な言動に似合わぬ丁寧な仕事をやってのけ、気を利かせてお茶まで用意してくれたのだ。今は彼女が夕ご飯を部屋まで運んで来てくれるのを待っている。

雷は未だに止んでおらず、時折、眼が眩む程の光を発して激しい音を響かせていた。

「しかし、最初は驚いたよ……。失礼だけど物の怪かと思う……」

「はいはい、持って来ましたよ。ヒッヒッヒッ」

椎名が話をしている最中に、お千代が器用に片手ずつで二つのお盆を持って、襖を足で開けていた。客に対して物凄く無礼な行いだ。鈴音も椎名も批判など言わず（正確には言えず）、料理の礼を言ってお盆を受け取った。

「ここはお千代さんだけで、経営していらっしゃるのですか？」

鈴音が料理の揃えられたお盆を、丁寧に磨かれた机に置いて、気まずい空気の中で尋ねた。雷がまた一段と光り、お千代の顔に暗い影を一瞬作っては轟音と共に消えた。お千代は何が可笑しいのか不気味に笑いながら答える。

「ヒツヒツヒツ。いんやゝわしと死んだ夫と息子でやっとなるよ。二人は偶にやって来て、部屋を掃除してくれるんだ。ヒツヒツヒツ……運が良ければ会えるかもねえ、お嬢ちゃん」

椎名が割り箸を割ろうとして、その体制で動きを止めた。鈴音は何と言葉を返せばいいのか判断が付かず、迷った挙げ句に顔を引き攣らせたまま「あ……会えるといいな」と適当な返答をしてしまった。すると、お千代が眼を光らせ、狂ったように笑い声を上げて言った。

「ヒツヒツヒツ。会える……会えるとも……ほら、直ぐ後ろにいるじゃないか」

鈴音は驚き、ほとんど反射的に後ろを振り返った。其処には掛け軸と木の置物（不気味なおじさんが不愉快に薄ら笑いを浮かべた像）以外は何も無く、再び正面を向いた時には、椎名が溜め息を付きつつ肩を竦めていた。

「ヒツヒツヒツ、笑える」

お千代はそう言うってから乱暴に襖を閉めて、床を鳴らしながら何処かへと去って行った。

「笑えないね……」

椎名の言葉に、鈴音はゆっくりと頷いた。夕ご飯に用意された物は普通の懐石料理で、場所さえ違えば最高に美味な物だったことだろう。しかし、残念ながらこの暗い空気の中ではほとんど味を感じる事も出来ず、食べ終えても満腹感生まれなかった。

夕御飯を食べ終えた後は盆をお千代のいる部屋まで持って行き（道中五匹の御器嚙を見かけた）、その後お千代の案内で湯屋まで案内された。男湯と女湯に別れており、中は案外広かった。ただし問題は湯が温くて、水の質もあまりいい物とは言えず、その上、灯が弱くて辺りが薄暗いので、何度も転倒しかけた事だ。そして、少なくとも女湯には自分一人しかいなかった。その事が余計に恐怖を募らせた訳である。

湯浴びを済ませてさっぱりとした後は椎名とそれぞれの部屋に戻り（椎名が湯屋の前で鈴音が出てくるのを待っていてくれた）、自分で布団を敷いて寝っ転がった。布団は柔らかく清潔で、相変わらず手入れが行き届いている。鈴音は相当疲れていた為に、直ぐ睡眠りに付いた。

寝付いてからどれ位の時間が経ったのか正確には分からない。とにかく、鈴音は目を覚まして、まだ真っ暗な中で起き上がり、廁に行こうと部屋の襖を開けた所で、廁が何処か分からない事に気が付いた。

（聞いておけばよかったなあ……）

お千代はとっくに眠ってしまっただろう。鈴音は仕方なく、暗い

旅館の中を厠探しに行った。やっとそれらしいと思われる扉を開けると、中には般若の大きな像が入っており、鈴音は危つく叫びかけた。それからも眠たい中を我慢して探し回ったが見付からず、さらに恐怖心が高まっていった。

鈴音は数分間歩き回り、襖の障子から明かりが差す部屋を見つけた。中からは何やら話し声が聞こえてくる。お千代らしきその声に、鈴音は安堵の息を付いた。

(良かった……これで、もう探し回らないで済む……)

鈴音は襖を開けようとして、中から聞こえてくるお千代の声が震えている事に気が付き、手を止めた。

「ああ……今日はお客さんが二人来たよ。ほら、だからわては大丈夫……大丈夫だから……」

奇妙な笑い声も無く、悲しそうに呟くお千代の言葉に対して返事はない。鈴音はどんな状況になっているのか上手く状況が掴めず、襖に手を置いたまま動けなかった。

「ああ、しまった。見付かってしまったようだね」

お千代が襖を挟んで鈴音を見て言った。鈴音はドキッとしてあたふたしたが、お千代は全く声の強弱を変えずに続けた。

「お嬢ちゃんだね？ ヒツヒツヒツ…… いいよ、入って来なさい」

突然に襖が開くと、そこにはお千代がとびつきりの不気味な笑顔で鈴音を見つめて立っている。

「ヒッヒッヒッ……さあさあ……お嬢ちゃん……追いでえなあ」

鈴音は寝巻きの袖をお千代に引つ張られて、無理矢理部屋に入れられた。鈴音を部屋に入れるとお千代は襖をこれまた勢いよく閉めて、「ヒッヒッヒッ」と頻りに笑いながら、座布団の上に座った。

鈴音は蠟燭の僅かな明かりを頼りに辺りを見渡す。この部屋は仏間らしく、線香の独特な香りがしている。眼が慣れてくると、据え付けられた立派な仏壇の姿が、段々と見えてきた。

「よかったねえ……会いたがっていただろう……ヒッヒッヒッ……
夫と息子だよ」

お千代は仏壇から目を離さずに、独り言を呟くように言った。鈴音は畳の上にゆっくりと腰を下ろすと、その途端に、お千代という人物を理解することが出来たように思った。

14 仏間にて偲ぶ

丑三つ時の仏間は、不思議な寒々しさを感じさせる。

お千代は座布団の上に座って、ずっと黙ったまま微動だにせず、仏壇を眺め続けている。鈴音は汚れた畳の上に座って、一言も発さず、お千代の後ろ姿を物憂げな瞳で見詰めていた。数分前までは廁に行こうと旅館内を彷徨していた事など、とうに忘れている。

暫くすると、眩しい光と共に大きな轟音が天空から響き渡った。それを合図としたかのように、お千代がゆっくりと鈴音に話しを切り出す。

「ヒツヒツヒツ……お嬢ちゃん……わたのことが、気になり出しているんだろ？」

鈴音にとってこの言葉は、正しく「ズバリ」だった。鈴音はつい先程から、お千代の過去について考え込んでいたのである。何故ならば、自分とお千代に、何処か近いところを感じたからだ。

今まで出会った人間達には感じなかった、不思議な感覚。鈴音は自分とお千代の何処が似ているのかを考量していたが、中々見付けることが出来ず、相違点ばかりが目立って探し出されるのである。そうして思索している間に、自分が特筆して常人と異なる点と言えば過去の出来事であり、もしかするとお千代は、自分と同じような経験をしてきたのではないかと、鈴音は結論付けたのだった。

しかし、今日出会ったばかりの他人に、「アナタは過去に辛い経験をしましたか？」などと尋ねられても、失礼だと感じて答える事

はないだろう。だからこそ鈴音は、ずっと黙っていたのだ。

「遠慮する事はないよ……ヒツヒツヒツ……わても、ここにお嬢ちゃんが出来た時からずっと、お嬢ちゃんのことを気になっててね……ヒツヒツヒツ……」

お千代が相変わらず仏壇を眺めたまま言った。笑う度にその貧相な肩が揺れている。鈴音はお千代の言葉に暫く黙って俯いていたが、直ぐに耐えられなくなり、顔を上げ、思い切って尋ねてみた。

「お千代さん、アナタは昔……」

鈴音が話し始めたところで、お千代が絶叫に近い大きな笑い声を上げた。その瞬間に雷が鳴ったが、その轟音すら掻き消すほどの大きな笑い声だった。鈴音が呆気にとられて口を開けたままポカンとしていると、お千代がまた突然に笑うのを止めたので、再び仏壇に静寂が訪れた。

二度目の静寂はそう長くも続かず、その短い沈黙を破ったのもまた、お千代だった。

「やっぱりねえ、ヒツヒツヒツ……お嬢ちゃん、アナタ捨て子だろ」

お千代の言葉に、鈴音は驚いて押し黙った。何故ならば、あまりにも正直で直線的に、失礼な言葉を受けたからである。おまけに、お千代のその失礼な推測は外れていない。鈴音は過去に、捨て子と呼ばれても仕方の無い様な境遇を送ってきているのだから。

鈴音が黙っていると、お千代が仏壇から目を離して上半身だけを鈴音に向け、追い立てる様に言った。

「そうだろう？ そうなんだろう？ わてもそうさ！ 簡単に捨てられた」

鈴音が何か言葉を返す前に、お千代は自らの過去を話し始めた。

「わては戦争中に捨てられて、孤児となった。それでも良かったよ…… あんな親なんて必要ないね。だけれど、若かったわてには食い繋ぐ方法が無かった。当然、飢餓に陥ったよ」

百年戦争中に孤児が急増し、餓死者が増えたという話しは、鈴音も鬼人の学び舎で習っていた。だが、鈴音はその被害者本人が目の前にいるという状況に、同情したくもあり、申し訳ない気持ちにもなった。お千代が自分の過去を嘲るかのような口調で続ける。

「そこで、わては出会った。今は亡き旦那にね。助けて貰ったんだ。身も心もボロボロの、拾ったところで得る物が何もないような女に、救いの手を差し伸べてくれた……」

「月日が経ち、わて等は夫婦となった。戦争が終わって、痩せ細った土地を耕し、お互いに協力しながら、息子も生まれて、幸せだったよ……。そんなある日、息子が十歳になった祝いを兼ねて、家族三人で 生け贄祭 に行った」

お千代の声音が、今まで以上に暗くなっている事に、鈴音は気が付いた。

「生け贄祭…… 毎年のように王様の詔を代理人が話し終えた時に、奴等がやって来た」

「奴等……?」

鈴音が尋ねると、お千代は「ヒツヒツヒツ」と笑ってから、名前を出すのも汚らわしいかのように、顔を目一杯に顰めて、「人喰らい さ」と答えた。

「奴等が何処から中心都に侵入してきたのかも分からないけれど、とにかく暴れた。国王の直属部隊も種族が違う相手には敵わなかった。わてに救いの手を差し伸べてくれたあの人は、大混乱の中で奴等の剣に貫かれて、あっさりと殺された」

簡単に言つてのけるお千代に、鈴音は動揺を隠せなかった。自分の命を救ってくれた恩人 - 鈴音にとつてはレインおじさんが、突然に命を奪われる……想像しただけでも涙が滲んで、目の前がグラグラと揺れた。

「わては息子の手を引いて逃げた。ああ……多くの人が殺されて……わてと息子の番になった……奴等の鞭がわてを打とうとして、息子がわてを庇った。そこで兵士の援軍がやって来て、奴等を漸く追い出し始めた。けど、息子はもう駄目だったよ。当たり前さ……あれだけ……血が出ていたんだから」

鈴音はお千代の話聞き終えて、鬼人と人間の亀裂を今までで一番はつきりと見たように思った。同時に、自分が何故お千代に何処か近いところを感じたのかを理解した。捨て子であったというばかりでは無い。鬼人に人生を変えられた。それがどんな方向であるかは別だが、二人の共通点だ。

「ヒツヒツヒツ……わてはもう、正気でなどでいられなくなったのさ。今わての中にあるのは、わてを捨てた家族への恨みだけだよ。」

わてが捨てられることが無ければ、旦那も別の場所で幸せになっていたろうし、息子も最初から苦しまずに済んだだろう?」

お千代が最後にそう付け加えると、鈴音は耐えられず、自分の思いを口にした。

「わたしは、お千代さんのように強くないから、現実から目を背けているだけかもしれません。それでも、言わせて下さい」

お千代は再び仏壇の方に向き直った。しかし、鈴音は構わず続ける。

「お千代さんがおっしゃたように、わたしは捨て子です。それでも、家族を恨んでいません。人が誰かを恨んでしまえば、それが何時の間にか膨れ上がって、自分自身でも手が付けられなくなるようになると、思うんです」

「それはお嬢ちゃんの本心かえ? 恨まないと? それすらなければ幸せに生きることが出来たかも知れないのに? 誰かの理不尽で人生を捻じ曲げられる事を、認めるのかえ?」

鈴音の言葉に、お千代は振り返って取り乱したように言った。鈴音は首を振って、慎重に選んだ言葉で返事をする。

「認めはしません。わたしも、許せないことがたくさんあります。でも、恨みたくないんです。恨みは病原体みたいに、感染していきます。許せなんて……とても言えません。でも、自分を救う為には、自分が幸せになるしか……ないと思います」

鈴音の言葉が、お千代に届いたのかどうかは分からない。ただ、

お千代は一言、「良い子だね」と呟くと、再び黙って仏壇を眺め始めた。

翌朝には雨は止み、暖かな快晴となった。しかし、鈴音と椎名が旅館を出る頃になっても、お千代の姿が何処にも見当たらないのである。お千代が何処に行ってしまったのか、二人には知る由もない。ただ、玄関に置いていた鈴音の足袋の上に、何時の間にか手紙が置かれていて、達筆な字でこう書かれていた。

「わてが帰ってくるまで、この旅館はお嬢ちゃんの物にしておくれ」

椎名は心配そうに旅館内を探し回っていたが、鈴音はその手紙を読んで、不思議とお千代の心配をする必要は無いように思えた。

15 太陽国中心都

中心都へと近づくに連れて、周囲の景色はゆっくりと姿を変えていった。

赤坂村から花宮村まで流れていた長く清らかな川は途中でその姿を消し、連なっていた山々は徐々に遠くへと消え去った。自然に彩られた風景の変わりに、人間の文明が築かれた世界が広がっている。鈴音はそんな見慣れぬ景色に、強い違和感を覚えた。

中心都は本来、中流階級から上流階級の者でなければ立ち入ることが出来ない。下流階級の者や、太陽国に住むことが許可されていない流れ者は、一部の例外を除き、中心都の周りに深く掘られた堀から近づくことを禁止され、それを破れば死罪の宣告を受ける。

そんな哀れな民達に、太陽国の真の繁栄を見せて上げようと訴え始めたのは、この国の初代生け贄に自ら志願したことで有名な少女、月夜姫である。

才色兼備な貴族の娘・月夜姫は、大変に優しい心根を持つ娘だったそう。自ら生け贄に志願する見返りに、自分の命日を太陽国の為の祝い日にして欲しいと国王に告げたそうである。それ故、この生け贄祭が開かれる今日だけは、中心都唯一の出入り口である世渡り橋の警備が解かれ、身分関係なく中心都に出入りする事が許される。

例え、それが人喰らいに付け込まれる隙になろうとも、その

文化は六百年間途切れる事無く続いている。

「すつごーい！」

視界を埋め尽くす洪水のような群衆に、鈴音は瞳を輝かせながら大声で叫んだ。しかし、その叫び声すら人々が無意識のうちに発する騒音に掻き消され、群衆の誰一人としてその声に反応する者はいなかった。

「さあ鈴音さん、あの橋を渡ったら中心都だ」

椎名が優しい瞳で鈴音を見詰めながら、何百人もの人々が列をなして渡っている大きな架け橋を指差して言った。鈴音は頷き、人々の列に紛れて歩き出そうとしたところ、椎名が肩を掴んだので足を止めた。

「どうかなさったのですか？」

鈴音が尋ねると、椎名は自分の声を周りの騒音に掻き消されないように、鈴音のすぐ耳元で言った。

「これだけの人の中で離れずに歩くのはまず無理だよ。ここは別行動にしよう。それに、僕は用事を済ませてこないといけないし……それまでは、鈴音さんの好きなように行動してくれていいよ」

（そうだ、椎名さんには用事があったんだ……鬼熊を診るという大変な用事が……）

鈴音は頷いてから背伸びして、椎名の耳元で「気を付けて下さいね」と労いの言葉を掛けた。椎名はニコツとしてから、鈴音の頭に優しく手を置いて答える。

「大丈夫さ。用事が済むのは多分お昼頃、その時間帯には太陽城の城下にある 神住み広場 という広い土地で王様の代理人が祝辞を述べている筈だ。祝辞が終わり次第に例の物が晒される予定だから、待ち合わせはその時にしよう」

「昼過ぎ…… 太陽城の近く…… 王様の祝辞…… ですね。分かりました」

鈴音は椎名の言葉を復唱して微笑むと、彼に一時の別れを告げて人々が歩いている列の中に紛れ込んだ。列に並んで歩いている人達は老若男女、纏っている衣も皆それぞれ違った文化が感じられて、国中の人々が集まっているのだろうと鈴音は推測した。

周りを人に埋め尽くされて、何度も転びそうになりながら、鈴音は知らぬ間に世渡り橋を通過していた。巨大な街 - 自然を煉瓦で埋め立てた中心都…… 固い地面に石のような家…… 人々に阻まれてその姿が見えなくとも、雰囲気で分かる。煉瓦の赤・茶・白の色彩によって埋め尽くされた街の姿が。あまりにも数多く連なる家々の黒い影が、太陽の暖かな光の代わりに、冷たく地に差している。

(変わってない…… やっぱ、ここは何処か寂しい)

鈴音は人々が行き交う通りから僅かに反れ、あまり人のいない道を選んで歩くことに決めた。慣れていない為なのか、群衆の中で歩いていると、呼吸が苦しくなるように感じた故である。

鈴音が見かけた人の群れは大抵の場合、家族か友達連れだった。鈴音はそういった人々の様子を眺めていると、微笑ましくもあり、僅かに空しくも感じた。屋台に売られている物は子供が遊ぶような玩具が多く、彼女はチラッと売り物を眺めて何も買わずにそこから立ち去るといった事を繰り返した。

どのぐらい彷徨していたのか、正確な時間は分からない。そう長い時間ではなかった筈だが、鈴音はもう祭りに飽きてしまっていた。と言うのも、中心都は全てが煉瓦に埋め尽くされており、どこに行っても同じような景色が広がっているのである。樹木や草花や動物が好きな鈴音にとって、中心都は心惹かれる場所では無かったようだ。

鈴音は、玩具売りの屋台から十歩程離れた場所にある木製の長椅子に座り、顎に手を当て、通りを行き交う人々を眺め始めた。

親に玩具を買って貰い喜ぶ子供、そんな我が子を愛しそうに見つめる両親。逆に、欲しい玩具を買って貰えず、不貞腐れた様子の子供もいる。祖父母を連れた一家。兄妹で楽しそうに走る幼児。四、五人の仲間達と愉快そうに話している少年・少女。恋人同士で手を繋ぐ男女。大笑いしながら歩く青年達。淑やかに歩く少女達……皆それぞれ階級も住む場所も違うのだろう。それでも全ての人々が、この日を精一杯に祝おうと、歩いて、話して、進んで行く。

鈴音は思う。今生きている皆は、それぞれ辛い出来事を経験して、それでも生きて、笑っているんだろう。やっぱり、鬼人と人間に大きいな違いなんて無い。神住み島の神木を取り囲んで行われる年に一度のお祭りでも、鬼人の仲間達皆がこんな風に、お互い笑い合っ

て生きていける事を祝っていたのだから。

長い間人々を眺めていると、鈴音の隣に、何時の間にか男が座っていた。男は雨が降っている訳でもないのに笠を深く被っていて、暗い色をした衣を身に纏い、気配をほとんど感じさせず、長椅子に腰掛けている。

「凄い人ですね……わたし、こんな光景は初めてです。アナタは、毎年この祭りにいらっしゃるのですか？」

鈴音は姿勢を正してから、隣に座る男に話し掛けた。男は何故か一瞬驚いたような素振りを見せたが、直ぐに平静を取り戻し、随分と低い声で答えた。

「毎年……ああ、そうだな」

男の顔は笠でよく見えないので、年がどれ程なのかすら分からない。ただ声から、まだ若いように思われた。しかし、鈴音はどうにも違和感を覚える。この男が隣に座っていても、会話をしても、まるで気配を感じられない。何も無い場所に話し掛けているような錯覚に陥る。

「それじゃあ、これだけ人がいても驚かないですよね……」

鈴音が笑顔で言っても、男は微動だにしない。おそらくずっと無表情のままである。しばらく沈黙が流れ、鈴音がまた行き交う人々に目を向けた時、男が静かな声で言った。

「問題は、この中の何人が犠牲の真なる意味を理解しているか……だ」

鈴音は男の言葉に驚いて、男を再び目視した。犠牲とは……生け贄のことだろうか？ 真なる意味とはどういう事だろうか？ 鈴音が疑問を投げ掛ける前に、男は音を出さずに立ち上がり、人混みの中へ去ろうと動いた。

「ま、待って……」

鈴音も急いで立ち上がり、男の腕を掴んで男を止めた。男は手甲をはめており、手甲には仕込み刀が付けられている。鈴音は驚いたが手を離さず、何も言わずにその格好のまま止まった。そうしていると、男が僅かに笑って、慣れた動作で鈴音の手からスルリと自分の腕を抜いた。

「安心しろ……俺は賊などでは無い」

男の言葉に、鈴音は納得することなく頷いた。この男はいつたい何者なのだろう。何か尋ねようにも、何から尋ねれば良いのかわからない。黙っていると、直ぐにでも男は去ってしまいそうだ。

鈴音は瞬間、頭に思い浮かんだ質問を、無意識の内に尋ねていた。

「アナタは……えつと……お名前は？」

鈴音の問いに、男は口元をニヤツとさせてから、答えた。

「九百六十七番……だ」

鈴音が首を傾げて、次に瞬きをした時には、九百六十七番と名乗った男の姿はどこにも無く、楽しそうに行き交う人々の姿だけが、

鈴音の視界に写っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2160w/>

怨恨の崇拜者

2011年11月20日20時06分発行